



Title	アリストテレスの弁証術における言語哲学：本質, 定義形成句そして意味表示の二重機能
Author(s)	千葉, 恵
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 130, 1(左)-67(左)
Issue Date	2010-02-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/42725
Type	bulletin (article)
File Information	ARCS130_002.pdf



[Instructions for use](#)

アリストテレスの弁証術における言語哲学 — 本質，定義形成句そして意味表示の二重機能 —

千 葉 恵

序章 序論

アリストテレスの形而上学思考の中心に、「第一のかつ端的な存在」(1028a30)に関する実体の理論がある。実体論はその中心を本質の理論に持つとしばしば言われる。しかし、「本質」とは何を意味しているのか。語「本質」(essence)はギリシア語‘*to ti ên einai*’の翻訳であるが、この句は補語Fを補うとき文字どおりには「Fであることは何であったか」ということを表現している。この句は彼の先行哲学者によって用いられてはいなかったもので、それは恐らくアリストテレス自身により考案されたものであるか、少なくとも彼により正確な哲学的意味を付与されたものである。それはしばしば「本質」と訳されてきたが、彼がなぜそれを採用しているのか、またそれは何を意味しているのかに関しアリストテレス研究者のあいだでほとんど同意が形成されていない⁽¹⁾。

本稿における私の目標はアリストテレスの弁証術における‘*to ti ên F einai*’（「Fであることは何であったか」）とその説明言表であるとされる‘*horos*’、それについては「定義形成句」と私は訳すが、これらの意味と役割を明らかにすることである。言論の技術の中核を構成するこれらの概念の解明は言語と心魂と実在の関係を考察するアリストテレスの言語哲学解明の基礎作業となるであろう。本稿は五つの部分から構成される。

第一部（第二，三章）において、私はこれらの術語をその歴史的な文脈に

おく。そしてアリストテレスは彼の弁証術をソクラテス的な対話の方法の体系化と改善の試みにおいて展開していることを明らかにする。弁証術の理論とその実践を区別することは、アリストテレス自身がなしているように、重要なことである。彼はその理論の主要な構成要素を、それには‘*to ti ên einai*’（「(F)であることは何であったか」)をも含め、「ロギコース (*logikôs* : 形式言論構築上)」⁽²⁾に導入している。この「ロギコース」という方法は弁証術および形而上学双方において採用されている。このように理解される弁証術の理論は「ディアレクティコース (*dialektikôs* : 弁証術的に)」という異なる副詞を用いて記述されるその実践と対比されうる。弁証家 (*dialektikoi*) は、弁証術的に、見解 (臆見 (*doxa*)) の領域において、提出されたいかなる命題にも賛成と反対の論拠を提示することにより、吟味する。それに対し、弁証術の理論は存在と同一性の哲学的分析の一部としての、伝統的に「プレディカピリア (項の諸タイプ)」と呼ばれるものの理論と述定のおよび存在者の範疇の理論に基づいている(註2参照)。この理論は弁証術の実践が敬意をはらうべき諸区別を、そしてその実践が従うべきトポス論等の諸規則を提示するアリストテレスの試みを形成している。

第二部 (第四章) において、私は『トピカ』A. 4-5 におけるアリストテレスのプレディカピリアの理論を考察する。私の提案はこれら「定義的」(*horika*) と呼ばれるプレディカピリアはソクラテスの「Fは何であるか？」(*ti esti F*;) の問いに対する四つの可能な網羅的で相互に排他的な応答を指摘しているというものである。弁証家は、プレディカピリアの理論に基づき、「何であるか？」の問いに対する応答を持つことなしに、何であれいかなる命題をも吟味することができる。アリストテレスの理論のこの側面は定義へのソクラテス的な探究を悩ませたいくつかの難問を解決すべく立案された。この背景のもとで、われわれはなぜ彼が「Fであることは何であったか」(*to ti ên F einai*) (以下「何であったか」と略記することがある) という概念そしてその説明言表の名前、即ち「定義形成句」(*horos*) を導入したかを見て取ることができる。これらはそれぞれ「何であるか」(*to ti esti*) と「定義実践」(*horizein*, *horismos*) の変容形である。アリストテレスは術語「定義形成句」を必要と

していたのであり、それは理論的な仕方では、定義するその実践において用いられる下位一文 (sub-sentential) または下位一命題の構成要素を吟味するためである。

第三部 (第五章) において、私は定義を成功裏に遂行すべく用いられる説明言表のタイプを特定するさいに「定義形成句」と「何であったか」が演じる役割に焦点をあてる。定義形成句は定義されるべき対象を意味表示する名前または別の句と交換することができる。私は、「定義形成句」(*horos*)と「定義」(*horismos*)⁽³⁾のあいだに何ら差異を見出さない標準的な解釈に反して、定義形成句は一つの定義を表現すべく用いられる命題の下位一文の構成要素であると論じる。私の解釈によれば、句「何であったか」により意味表示されるものは定義可能な存在者 (*dynaton tina horisasthai*) であり、それは一つの成功した定義形成句により特定されるが、それは他の三つのプレディカピリアからそれを識別する過程により把握されるというものである。表現「何であったか」はソクラテスが「何であるか？」(*ti esti*;) の問いにおいて求めている理想的な答えを捕捉すべく考案されている。私はこの表現の文法的分析を提示する、そしてそのさいソクラテス的探究の文脈の内部でいかにその表現が生じているかを提案する。私の見解によれば、その表現は問答相手がソクラテスの「Fは何であるか」の問いにおいて彼が求めているものを見過ごしたという文脈において、ソクラテスの「何であるか？」の問い直しの再定式化から生じている。「FにとってFであることは一体何であったか？」という表現による問いは、過去形を用いているが、問答相手に彼が、例えば、Fの一事例だけを提示することによる、彼の最初の応答においては、Fそれ自体を見過ごしたということに気づかせている。

第四部 (第六、七章) において、私は『トピカ』A. 8-9を考察することにより範疇論の弁証術的起源を解明する。アリストテレスはA. 8においてひとはあらゆる命題において「何であるか？」の問いに対する四つの可能な応答の一つまたは他のものを見出すであろうことを確認する。彼は「何であるか？」に対する類と定義形成句による肯定的な応答と否定的な応答即ち固有性と付帯性に分割し、さらに主語と述語の换位可能性という固有性条件によ

り肯定的な応答即ち定義形成句および固有性と否定的な応答即ち類と付帯性に分割することにより、プレディカビアの排他性と網羅性を確認している。

A.9において、彼は、一つには述定の範疇(CP)ともう一つ存在者の範疇(CE)という、対応する二つの範疇のリストを提示する。彼は様々な日常の疑問詞形を考察することにより十の述定の類(CP)を区別しそしてアカデメイアの徒すべての定義の試みは彼の新しい述定の理論の内側で理解されうることを示している。疑問詞の種類と存在者の種類のあいだに一つの対応を確認することを通じて、アリストテレスは討論における混乱を避け、そしてそのようにして弁証術の実践を容易にするであろう背景理論を確定することに成功している。換言すれば、「何であるか？」の問いがどれだけの仕方でも語られるかを分類することにより、存在者の種類の分類(CE)を導いている。実体に対する「何であるか？」は実体により応答され、性質例えば「白」に対する「何であるか？」は性質例えば「色」により応答され、実体存在、性質存在等十の存在者の範疇に分類される。実体範疇と性質範疇の述定様式上の差異は実体には「何であるか？」の問いだけが提示されうるが、性質等の存在範疇には「何であるか？」とともに実体に対する帰属の様式を問う「いかにあるか？」「どれほどあるか？」「いつか？」等の述定範疇を判別するとき用いられた一般疑問詞による問いが対応している。こうして、実体と属性の存在論的差異の基礎理論が「何であるか？」の問いの分析を通じて提示されるにいたる。

最後(第八章)に、私は定義形成句の幾つかの *topoi* (諸トポス、(議論の)場、論点)を吟味する、そして『トピカ』における「何であるか？」の形式的な分析は『分析論後書』における因果論的知識の説明にとってそして『形而上学』における存在の分析の説明にとっての背景理論を提供していることを明らかにする。

第二章 弁証術の実践とその理論の区別

『トピカ』において展開される弁証術の理論は、説得をこととする弁証術、

議論における勝利をこととする争論術そして妥当な推論をこととする論理学のような、議論の技術に適用されるが、それはそれ自身特有の目的を持っている。その目標は、問答者により提示されている諸命題をひとがそれを媒介にして（またはそれにより）確立しまた覆すことができるトポイ（諸論点）を提出することにより、議論が適切に遂行されているかを確定する一般的な様式を定めることである（172a35f）。弁証術的議論は、個別諸科学とは異なり、だが哲学と同様に、「どの特定の類にも関わらない」（172a12）。それは、或る科学の固有の諸原理により特徴づけられるものとは判別されるレベルで、普遍命題を考察する。これらの言明は範疇やプレディカビリアまた「同」や「異」などの普遍的な術語の諸理論に基づき吟味される。

アリストテレスは一つのそして同じ命題ないし問題は見解（ドクサ）の領域において「弁証術的に」そしてその真理との関連において「哲学的に」論じられうると主張する。「命題と問題について、三つの区分がある。それは倫理的、自然的そして形式的（*hai de logikai*）である。…哲学的にはわれらはこれらを真理に即して（*pros philosophian kat'alêtheian*）対処しなければならない、しかし弁証術的には見解（ドクサ）に対して（*dialektikôs de pros doxan*）対処しなければならない。すべての命題は可能な最も普遍的な形式において獲得されねばならない」（105b19-32）。ひとが倫理的ないし自然的命題を「最も普遍的な形式において」考察するとき、それらはそれらの固有の類の次元よりも基礎的な次元において、弁証術的にまたは哲学的に形式的かつ一般的な（*logikai*）概念や命題を用いて、分析される。例えば、「熱と冷」のような自然的術語や「善と悪」のような倫理的な術語は弁証術的に「同」と「反対対立」の概念により対処される。形式的な（*logikê*）命題「反対対立するものの知識は同一である」（105b34f）は倫理的および自然的双方の論点に適用される⁽⁴⁾。弁証術的实践はこの特有の普遍的な次元において諸命題を吟味する（172a28, cf. 171b3-8）。

弁証術は、哲学との対比において、「吟味の技術」であり、それは「ひとは、たとえ彼が知識を欠いていても所有するでもあろうところのもの」である（*Soph. El.*, 11. 172a21, 171a21-23）。弁証家は、ドクサの領域に関わるが、方

法についてのアリストテレスの教則に従い自らの吟味を遂行すべきである。他方、哲学者は、より上位の学問的営為に従事するが、彼自身の存在論的な関与を（弁証家がそうするように）括弧に入れ棚上げして、弁証術的实践にも同様に従事しうるものである。哲学と弁証術において、われわれの知的活動は異なるゴールを持つ。『形而上学』Γ. 2 において、アリストテレスは「哲学は能力の方向において弁証術とは異なる。…弁証術は単に批判吟味的であるとき、哲学は知識を主張する」と述べる（1004b23-25）。弁証術の实践は、自然の因果的構造についての必然的な知識を持つと主張する論証科学とそして哲学と対比される。弁証術的实践はドクサの次元に留まるので、それは知識を生み出しえない。しかし、それでもなお弁証家にとっては、反例を提示した相手の主張を論駁し、そうすることにより誤った見解を回避することが可能である。さらに、彼が弁証術の理論により確立された諸規則に従う限り、彼は他者から正当な同意を勝ち取ることができまたそうして彼の信念を確認することができる。実際、弁証術的实践は、当該の能力が哲学的实践に改めて方向づけられるとき、知識の獲得に有益であろう（163b2-11）。これらの個所において、アリストテレスはこれら二つの活動の異なるゴールを判別している（105b30f, cf. 72a7-11, 100a27-b21, 162a15f, 162b31-33, 141a29）。

一方、弁証家の实践はどの提示された命題をも批判的に吟味するが、彼が依存するその理論は存在と同一性というごとき主題の哲学的な分析のうちに基礎づけられる。これらの主題の一般的ないし形式的説明は、プレディカピリアと範疇をも巻き込みつつ、『トピカ』においては弁証術的そして哲学的实践にとっての固有な基礎として提示される。

アリストテレスは普遍的な概念および命題がそこにおいて吟味されうる異なる様式を示すべく二つの副詞表現「弁証術的に」（*dialektikōs*）と「形式言論構築術上」（*logikōs*）を用いている。第一の術語は弁証術の实践を述べており、それはドクサに基づき反対の諸観点により裏付けられる賛成と反対の命題を吟味する（eg., 105b31, 161a33, 183b3. cf. 81b22, 403a2）。対照的に、第二の術語はプレディカピリアと範疇（これらは弁証術的实践のプロレゴメナである）に基づき存在と同一性の一般的な分析を述べている（eg., 82b35

-83a1, 1030a25f)。かくして、例えば、術語 '*to ti ên einai*' ('何であったか') は『形而上学』においては「形式言論構築術上語れば」(*logikôs eipein*) という句により導入されている (eg., 1041a28)。弁証家は弁証術的に諸命題を吟味することを求めるあいだに、彼の実践の基礎にある理論は哲学的に基礎づけられている。別様に言えば、アリストテレスが弁証術の理論を書くとき、彼は弁証家としてではなく哲学者としてそれをなしている⁽⁵⁾。

弁証術の理論と実践を判別することは重要である。幾人かのアリストテレス研究者はこの区別を見過ごしたために迷い込んでしまっている。例えば、T. H. Irwin は「純粋な」弁証術から「強い」その区別に導かれ、そして「私はアリストテレスが弁証術と客観的な第一諸原理についてのパズルに対する何ら答えを持たないと言わざるをえない」と認めるよう強いられている。彼の困難が生じたのは、彼が明らかに非アリストテレス的な「強い弁証術は客観的でありかつ単に共有見解的 (endoxic) ではない諸原理を見出すべくアリストテレスの主張を支援するか」⁽⁶⁾ という問いを提示したからである。Irwin が見て取り損ねているのは、エンドクシクな前提はこのタイプの前提に基づきプロとコントラの議論を提供することにより命題を吟味することに限定されている弁証術の実践の領域においてのみ有益であることである。同様に、彼は弁証術の理論のポイントを誤解した。つまり、アリストテレスは、一つの理論としてこれを展開するさいに、ロギコスな仕方 (*logikôs*)、例えば、存在と同一性の一般的な説明を進展させることを意図していたのであり、第一諸原理を単にエンドクシクな前提や実践から導出しようとしていたのではなかった。

この段階で、アリストテレスとプラトンの弁証術の関係を考察することは有益であろう。それらは似てもおりまた似ていなくもある。弁証術は、プラトンが理解するところでは、総合と分割に基づく最も知的な活動であり、真実在への探究の最も普遍的な哲学的方法である (eg., *Resp.*, 532a-d, 534b, 537d, *Soph.*, 253d, *Phileb.*, 55d-59e)。対照的に、アリストテレスは弁証術を、ドクサ、見解の領域にその実践を限定することにより、格下げした⁽⁷⁾。さらに、諸科学はその対象や領域そして方法に即して分類されるので、弁証術はアリ

ストテレスにとって（一つの）普遍的な科学ではありえない。それにもかかわらず、彼はプラトンから弁証術の哲学的な有意味性における信念を継承し、そして存在と同一性の一つの理論として、プラトンの著作のどれにおいても見出すことのできない「ロギコース」という様式において輪郭づけることにより、展開した（cf. *Theae.*, 164c）。私は彼が「ロギコース（形式言論構築術上）」という術語をプラトンの弁証術の或る側面についての彼自身の理解を示すべく導入したことを提案したい。

或る研究者たちは『トピカ』は単にアカデメイアにおける討論の、その専門術語と方法の大半を引き受けながらの、その実践の一体化であると指摘してきた⁽⁸⁾。しかしながら、私の見解では、アリストテレスはソクラテスとプラトンにより打ち立てられた基礎のうえに弁証術の彼自身の理論を展開する一方で（cf. 120b11-29）、彼は彼らが成し遂げたことを乗り越えている。この観点を背景に、術語「何であったか」と「定義形成句」と呼ばれるその説明言表の最初の導入を考察することにしよう。

第三章 ソクラテスの弁証術の遺産と欠陥

アリストテレスがソクラテスの弁証術の諸特徴と限界を議論する箇所はソクラテスの方法の延長として彼自身の弁証術の理論を見出していることを示唆している。彼はこう述べている。

ソクラテスは自ら人格の卓越性に没頭しつつ、その関連において初めて普遍的に定義すること（*horizesthai katholou*）を探求した。…しかし、ソクラテスが何であるかを探求したのは道理のあることであった。というのも彼は推論することを求めたが、何であるかは推論の原理だからである。というのも、当時弁証術は、「何であるか？」を問うことなしに（*kôris tou ti esti*）反対命題を考察することができるほどに、そして反対なものどもに同一の知識があるかを考察できるほどに、十分に強力なものではなかったからである。すなわちひとは二つのことを正しくソクラテスに帰属させることができる、帰納による議論と普遍的に定義する

ことである。これらは双方とも知識の原理に関わるものだからである (1078b17-30)⁽⁹⁾。

なぜソクラテスの弁証術は「十分に強力なものではなかった」のか。それはアリストテレスによりどのようにして強化されたのか。ソクラテスが理解したところによれば、問答の技術は対話相手とその応答の吟味を通じて同意に到達することにより、また帰納的に定義を形成することを求めることにより知識の獲得をめざすものであった。それを確立することにより、ソクラテスはそのようにして定義されたものについて或るさらなる主張を演繹することをめざした。このことの故に彼は、徳が何であるかを知ることなしには、ひとは徳が教授可能であるか否かを吟味することはできないと主張した。同様に、ひとは正義が何であるかを知ることなしに、正しいひとが幸福であるか否かを知ることができないと語った (*Meno.*, 86d, *Resp.*, 354c, cf. *Meno.* 71b)。

この見解を背景に、アリストテレスは「何であるか？」という問いを問うことなしに対立する主張を議論する方法を考案し展開させている。この基本的な態度は、弁証家にとって、「イエス」または「ノー」により応答することができる矛盾対立命題の対を提供することは重要なことであるという弁証術的実践の彼の考案において明瞭に見出される (158a14-17)⁽¹⁰⁾。かくして、彼は「反対対立するものについての知識は同一である」という命題を幾つかのトポスを提示することにより吟味している。当該のトポスは、例えば、問題になっている属性（「同一の知識」）は普遍的に反対対立するものどもに属するかを探求することである (109b13-29)。この吟味において、ひとは無数の個別の事象を考察する必要はなく、「反対対立するもの」の次の四つの種のそれぞれの種において、つまり、(1)相対的対立 (eg., 半分と二倍) そして(2)反対対立 (eg., 正義と不義) そして(3)欠如と所有として対立する術語 (eg., 盲目と視覚) そして(4)矛盾術語 (eg., 存在と非存在) について、同一の知識があるかを尋ねなければならない。

反対対立するものに関する別のトポスは、一つの反対対立が他の反対対立から帰結するか否かを考察することである (113b27-114a25)。そのような帰

結は勇気や臆病のような反対対立のケースにおいて見出されうる。というのも、一方、徳は勇気に随伴帰結するが、悪徳は臆病に随伴帰結する。他の諸帰結は、望ましいものと避くべきものを含意する場合のように、同様な仕方
で帰結する (113b27-34)。一つの見解を確立した論駁するために、われわれは「帰納により、それが有益である限りにおいて」反対対立するものどものあいだで当該の帰結を吟味する必要がある (113b29)。この方法はソクラテスの帰納を継承するものであり、それは一つの反対対立を提示しそして「はたして徳は教授可能か否か」という問いを探求する。アリストテレスは、加えて、反対対立を吟味する他の諸トポスを提出している (eg., 112a16-23, 147a29-148a9, 153a26-b24, 155b29-34)。諸論点はこの様式においてトポス論の内部で体系的に組織化された提示される。諸トポスを考察することにおいて、トポス論の役割は直接に「何であるか？」という問いに関与することなしに反対対立する主張を吟味する方法を提供することである。

定義は、ソクラテスが彼の名だたる「Fは何であるか？」を問うことにおいて求めていたものであった。倫理的な事柄において、「ソクラテスが求めていたもの」(1147b14) は個別的なパトスの状態に「引きずり回される」ことのない普遍的な判断により生みだされる「本来的な知識」であった (*Nic. Eth.* VII. 3)。ソクラテスは、徳が何であるかを知ることは探求者の人格を有徳なものにすべく十分なものであると考えて、敬虔や節制のような徳は何であるかを探求した。対話相手による当該の倫理的なことがらに関する定義の提示が彼自身の個人的な人格を表現するものであるので、定義への探求は不完全なものになりがちである。

アリストテレスによるソクラテスに対する批判の一つは彼が専ら倫理的なことがらに従事し「自然の世界全体」を無視していることにより、探求の範囲が限定されていることである (987b2, cf. 642a27-31)。アリストテレスは、数学を範型に論証理論に基づく知識のより厳密な理論を展開することにより、知識の範型として倫理的なものを採ることは不適切であると考えていたに相違ない。彼はさらにソクラテス的な探求がしばしば困惑と行き詰まりに終わっていることに不満足であった。このことは、ソクラテスの問答の方法

が適切に基礎付けられていないことを示している。ソクラテスは対立する二つの見解のどちらが正しいかを示すことができなかった、というのもそれを決定するために、まずそれ自体が何であるかがその定義を把握することにより知らねばならないという見解に固執していたからである (cf. *Nic. Eth.*, 1105b9-18)。

アリストテレスは『トピカ』最終巻、『ソフィスト的論駁』の終わりで、彼自身のプロジェクトを特徴づけそしてそれを歴史的な文脈のうちに位置づけている。彼はこう述べている。「われらの計画は提示されたどんな主題についても最も共有的な見解に基づき推論する能力を発見することであった」(183a37f, cf. 100a29-b23)。このプロジェクトにおいて、彼は「単に弁証術的に (*dialektikôs*) 吟味を遂行しうるだけではなく、知っているものとして (*hôs eidôs*) もまた遂行しうる能力」を涵養した (182b2f)。ここで彼は知恵を把握している哲学者ないし「知者の仕事」(*tou sophou ergon*) として彼の結論を打ち立てておりそして「リアリティなしに知恵の見せかけ」であるソフィストの技術と対比している (165a22f)。実際、『トピカ』において、存在の形式的な分析は進められ、部分的に、『形而上学』における存在の質料形相論的説明におけるさらなる役割を演ずる備えがなされている。彼は知っている者の特徴を述べている。「知っている者の仕事は、彼が知っている主題において誤謬を避けそしてそれらを知っているふりをしているものたちを暴くことができるということにある」(165a25-27)。アリストテレスはソクラテスをソフィストと彼自身のどこか中間に位置づけている。「というのも、ソクラテスはただ問うことだけをしてそして決して答えなかったからである、なぜなら彼は知らないということを告白していたからである。しかしながら、これまでの論述において、われらはこのこと [主張を擁護すること] (183b5) がいかなるものに関してまたどの原理に基づき、完遂されるであろうかに関して、そしてまた何に基づきこれらの論点の解決を見出すであろうかに関しても、それらとその数を明らかにした」(183b6-12)。これらの歴史的な記述において、アリストテレスは一方ソクラテスの使命を彼自身のものとしながら、彼はソクラテスとその先行者たちを悩ませた様々な難問の解決案を見出したことを

確信している。だからこそ、彼は彼自身を知っている者として知らなかったソクラテスと対比させることができるのである (cf., *Top.*, A. 3)。

しかしながら、ソクラテスの「何であるか」の定義を形成する試みは、事物は「何からできているか」をめぐるその構成要素の探求に従事した自然科学者たちとは異なるプロジェクトの「最初」(1078b19)の試みとして好意的に評価されている (cf. 984a18, 988b24ff, 993a11f)。類似の箇所において、アリストテレスは「何であったか (*to ti ên einai*) そして実体を定義する」という仕事は「ソクラテスの時代に展開された」と述べている (642a25, 28f)。プラトンは定義のソクラテス的様式を「受け入れた」(987b4)けれども、彼の仕事に対しては次の評価が与えられている。「誰も明瞭に「何であったか」そして実体を識別した者はいなかった。しかし、アイデアを信じている者たちはそれに最も多く言及している」(983a34f)。このことは、一方、アリストテレスにとって、彼自身そしてソクラテスとプラトンのあいだに本質と定義への探求における有意な連続性があったことを示唆しているが、他方、彼がそこにおいて重要な進展を成し遂げた領域もまたあったことを示唆している。

第四章 『トピカ』におけるアリストテレス弁証術の新しい工夫

4.1 弁証術における命題と推論

アリストテレスは『トピカ』において、アカデメイアにおける弁証術の方法を構築することを企て、彼独自の理論を展開する。「トポス」と弁証術的推論についての彼の説明は、この目標への到達のために与えられている。『トピカ』A. 4の冒頭(以下の引用 [A] [B])で、アリストテレスは彼の方法の概要を提示し、次のように指摘している。「探求の計画を持つことは、提出された主題について議論することをいっそう容易にする。…或る主題について両側面からアポリアを提示できることは、われらにいかなる主題においても真理と誤謬をいっそう容易に見抜かせることだろう」(101a29-36)。問う者が同意したり拒否したりするのを容易にするためには、諸議論を分析し評価する際に用いられ得る理論を構築する必要がある。したがって、諸議論がそれ

に基づいて構成されるところの基礎の数や特徴を確かめることは重要である。彼はこれらのことを、弁証術的推論を考察する際に提示する。アリストテレスは以下のように記している。

[A] 第一にわれらは、その方法・理論 (*methodos*) が何に基づいているかを考察しなければならない。もし諸議論 (*logoi*) がどれだけの多さのものに対してそしてどのようなものに対してあるか、そして何に基づき形成されているのか、そしてどのようにしてわれらはこれらについて解決の道を見出すであろう (*euporêsomen*) かを把握することができたなら、われらは十分に提示されている目標 [弁証術の理論構築] に到達するであろう。さて、議論の基礎は、推論 (*sylogismoi*) がそれについてあるところのものどもと数において等しくそして同一のものである。というのは、議論は命題 (*protasei*) から作られるが、推論がそれに関するところのものどもは諸問題 (*problêmata*) だからである。だが、全ての命題や問題は、固有性 (*idion*) か、類 (*genos*)、付帯性 (*symbebêkos*) のいずれかを明らかにする (101b11-18)。

弁証術の「方法・理論」を構築することは、独自の哲学的探求である。「われらは解決を見出すだろう」 (*euporêsomen*) という動詞がこの著作を通じて頻繁に現れることは、アリストテレスが自ら置かれている状況がいかなるものであるかを示唆している (e. g., 101b13, 102a13, 104a2, 105a22, 108b14, 110b5, 111b33, 183b10)。彼はアカデメイアにおいて提起されていた諸困難を解決するために、弁証術の新しい理論の発展を追求していた。「われら」という文法的主語が見られることは、彼がこのことを同僚みなが共有する共同事業ととらえていることを示す。とはいえアリストテレスは、彼が受け継いだ枠組みから、しかしそれを越えて、生じてくるところの新しい一組の術語(「本質」とそれを意味表示する説明言表の名前である「定義形成句」)を創出することにより彼独自の貢献をなす。彼のアカデメイアの同僚たちは、彼ら自身の「何であるか」の探求による定義実践を続けるものとして彼の企てを認め

えたのであるが、それと同時に、共有する諸問題に対処する新しい方法の基礎を発展させるものとして彼を認めることができる。

諸議論の基礎は「命題」と「問題」と呼ばれる。『トピカ』において命題と問題は、賛否 (*pro and contra*) の推論を提出することによって提起された問題を吟味する弁証術的实践の文脈において理解されるものである。「命題や問題はこれら [プレディカビリア (述語づけ可能なもの)] から生じる」(101b27f)。アリストテレスは、可能な全ての問題や命題は限定された相互に排他的な種類の述語の組み合わせの構成部分から生じること、そして全ての議論はこの限られた組み合わせに基づいていることを示している。命題と問題の分類は形式的 (*logikos*) 分析の立ち位置からなされる。全ての問題や命題がこれらプレディカビリア (述語づけ可能なもの) の一つから形成されるのであるから、「全ての命題と全ての問題は、固有性か類か付帯性を明らかにする」(101b17f)。アリストテレスの弁証術において、ひとは直接的に「Fは何であるか？」と問うことはできない。弁証術問題は「イエス」か「ノー」かで応答することができる形式に置かれねばならない (158a14-16)。弁証術のやりとりの中では、対話者によってなされた主張を吟味する者は以下の問いの形式において命題を置かなければならない。すなわち、「二足陸棲動物は人間の定義であるか？」や、「動物は人間の類であるか？」といったものである (101b32f)。応答者は単に諾否を述べることを要求される。アリストテレスはここで「定義形成句」(*horos*) よりもむしろ「定義」(*horismos*) (101b32) に言及しているのは、真偽が帰属する説明言表は句ではなく命題だからである (註4参照)。四つのプレディカビリアは、次節において考察されるが、このタイプの弁証術的議論の基礎的な成分である。議論を構成する命題はこれら四つのタイプのプレディカビリアから成っている。他方、問題は次のように置かれる。「二足陸棲動物は人間の定義であるか、否か？」(101b32f)。なぜなら、弁証術的推論は命題の矛盾対立する対に関わるからである。双方についての議論は、一つの問題として表現されるこれら矛盾対立する結論について提示されるものである。

弁証術的推論の理論は弁証術的実践の原動力であり、理論の諸帰結により

「トポス」を用いて置かれるものとして裏書される。「共有見解」(*endoxon*)は「全てのひとにか、多数のひとにか、賢者によって」持たれる見解である(100b21f)。「賢者たち」が自分たちの見解を与えるなら、彼らの権威故に普通の人々には容易に共有され得る(cf. 104a3-11)。弁証術的命題は、弁証術的推論における説得的な前提として共有見解から出発する。共有見解は弁証術の限界を規定する。例えば、弁証術のやりとりの文脈を無視してもよいなら(そのやりとりの中で、吟味する者は疑問形式においてその前提を問うのであるが)、二つの矛盾する推論の中で二つの矛盾する主張について彼は吟味を遂行できたであろう。(C 1)「全ての快は善である」(cf. 119a39, 120a15)や(C 2)「全ての快は悪である」は、それぞれ次の共有見解の前提を提出することにより推論される。すなわち、(C 1)は(大前提)「追求されるいかなるものも善である」と(小前提)「快は追及されるものである」から導かれる。他方、(C 2)は(大前提)「超過に導くいかなるものも悪である」と(小前提)「快は超過に導くものである」から導かれる。もしこれらの命題が弁証術的に(*dialektikôs*)、すなわち共有見解に基づいて賛否の議論を提出することによって、扱われるならば、その実践は見解(ドクサ)のレベルに留まり、双方の前提は必然的知識を提示するにはいたらない。

4.2 「本質」と「定義形成句」の導入

『トピカ』A. 4におけるアリストテレスの方法論的な所見において、われわれはおそらく現存する彼の著作の中でも「何であったか(本質)」(*to ti ên einai*)及び「定義形成句」(*horos*)という術語の最初の使用を見出す。彼は先に[A]として引用した所見を次のように続けている。

[B]だが、全ての命題と全ての問題は固有性か類か付帯性のいずれかを明らかにする。種差は、類的なものであるので、類と共に分類されるべきである。しかし、全てのものに固有なもののうち、一つの種類の固有性は本質(*to ti ên einai*)を意味表示し、その他の種類は意味表示しない。固有性を語られた二つの部分に分割し、本質を意味表示するもの

を「定義形成句」(*to men to ti ên einai sêmainon horos*) と呼ばしめよ (*kaleisthō*)、他方で残る部分をそれらに与えられる共通の表示に即して「固有性」と呼ばしめよ (101b17-23)。

[A]と[B]は、「それであることは何であったか(本質)」(*to ti ên einai*)及び「定義形成句」(*horos*)というフレーズが最初に導入される文脈を形成する。「呼ばしめよ」(*kaleisthō*) (101b21) という命令法は「定義形成句」(*horos*)という術語を、「本質」を意味表示する説明言表の名前として、ここで最初に導入されもしくは特定されることを示唆している⁽¹⁴⁾。しかし、後者のフレーズに与えられるはっきりとした説明は見られない。とはいえ、「固有性」や「定義形成句」という術語はそれがどのように理解されるべきかに関して手がかりを与えてくれる。アリストテレスは「固有性」とか「類」といった語をプラトンから受け継ぎ、A.2において‘*horos*’ (101a11) という語を用いており、彼は自らの読者がこれらの表現の目新しさに混乱することはないだろうと考えていた。彼が固有性の「残る部分」について新しい名前を考案しなかったという事実は、「固有性」が既になじみのある語である一方、定義について彼がより限定された目標、すなわちその特徴がアカデメイアにおける彼の同僚たちにより受け入れられるだろう目標を創出しようとしていたことを示唆している。

定義形成句(*horos*)は、固有性の一種であると述べられているように、「固有性」という表現によって理解されるものである。「定義形成句」および「その他の固有性」の双方により共有される「固有性」の共通の特徴は「換位可能な仕方です語づけられる」ということである。アリストテレスはA.8において「或るものについて述語づけられる全てのものは、その基体と換位可能な仕方です語づけられるかされないかのいずれかでなければならないということは必然である」(103b7f)と述べることにより、後述するように、四つのプレディカビリアを彼が演繹により導入することを正当化する。このことが含意するのは、「定義形成句」(*horos*)が何らかのもの、おそらくは文一下位(sub-sentential)構成部分を表しており、その構成部分はその基体と換位可能

な仕方です。述べられる、ということである。われわれは、このことが「定義形成句」(*horos*)の基礎的な特徴であるということ念頭におこう。

通常のギリシア語において‘*horos*’という語は或る領域の「境界」ないしは「目印」を意味する。この具体的な意味は、ひとがそれにより或るものから他のものを識別するところの境界線を意味表示すべく変容され得る。以下のようにその語のこれらの異なる使用には共通の特徴があり、その特徴とはすなわち、事物の境界を定めるもしくはそれらの同一性を確定するというものである。プラトンの著作において、「境界」とか「境界線」を意味する‘*horos*’という語の使用は(例えば) *Resp.*, 551b, *Laws*, 714c, 739d, 962d, *Polit.*, 293e, 296e において見出されるものである。われわれはこの使用のさらなる事例をプラトンのものと類似したアリストテレスの文脈において見ることができる(e. g., *Pol.*, 1280a7, 1271a35, *Nic. Eth.*, 1138b23)⁽¹²⁾。『トピカ』A.2においてアリストテレスは、この語をそれ自体として用い、「誤った推論を用いる者は真なる第一の前提に基づいてもまた共有見解に基づいても推論しない。というも、そのひとはその境界のうちに入らないからである (*eis gar ton horon ouk empiptei*)」と述べている(101a9-11)。誤った補助線の作図による誤った幾何学的証明を与える者の証明様式は弁証術的推論とも論証とも異なるが、それらのいずれに基づいても前提を想定していない(a8f)。一つの帰結として、そのひとは論証する者や弁証術を用いる者と同じグループには属さない。ここでアリストテレスはその語の通常の意味を念頭においている。しかし、境界により境界を定めるという役割が、哲学的な文脈における定義の同一指定する役割へと容易に移行され得る。

「定義」(*horismos*)という語は当該の事物の同一性を固定することによって境界を定めるという事柄を含んでいる。アカデメイアにおいては、「諸定義との関連で、われらは諸事物が同じものであるか異なるものであるかという問題の議論にとりわけ多くの時間を費やしている」(102a7-9)と言われている。事物を同一指定するという彼らの企ては、「Fは何であるか?」という問いへの応答として記述される。このことは、「定義」は「何であるかの説明言表と語られている」としてアカデメイアの人々による共通の理解に関するア

リストテレスの所見によって確かめられる (*An. Post.*, B. 10, 93b29)。

目下の文脈において‘horos’という語は、疑いなく定義と関係している。それは‘horismos’という語の省略であるように思われる。アリストテレスは類似のしかし異なる名前‘horos’を、「何であるか」(*to ti esti*)のこれも疑いなく一変形である新しい表現により捉えられる「何であったか」(*to ti ên einai*)それ自体を意味表示する説明言表の名前に割り当てている。省略された語がそれ自体、元の語の一部であることを示しているように、われらは‘horos’を「定義」(*horismos*)の文一下位構成部分として理解すべきである。不運なことに、英語では‘boundary’と‘definition’は語彙の構成が類似したものではない。‘*definion*’のような英語の語が仮にあれば有益であったことだろう。その語‘horos’が‘horismos’に対してあるように、それは‘definition’に対している。‘*definion*’はそれ自体でその語の構造により定義の部分的な構成部分であることを示している。アリストテレスがこのプレディカピリアに新しい名前を与えるとき、彼はこの類似性を念頭においていたと思われる。

「定義形成句」(*horos*)および「定義」(*horismos*)の双方は、「説明言表」とか「句」「比」「理解」といったような意味の幅をもつ語である‘*logoi*’という表現であると語られている (cf. 101b38, 102a5)。アカデメイアにおける定義の実践に問題があるならば、「定義」(*horismos*)という概念が改善されなければならない。私が示唆するのは、アリストテレスが正確にこのことをなすために、「定義形成句」(*horos*)という語を導入している、ということである。定義(*horismos*)は、人間が何であるかを述べて、「人間は二足動物である」(101b30)というような肯定的定式における、「Fは何であるか?」という問いへの応答において与えられる表現である。他方で「定義形成句」(*horos*)は文一下位構成部分であり、その役割は「人間であることは何であったか」を、例えば「二足動物」を、意味表示することである。そうであるならば、定義形成句(*horos*)に適用される表現‘*logos*’は、定義(*horismos*)全体にとって適切な語とは異なる語で理解されなければならない。‘*logos*’の訳として、私は文全体とその部分との両義性を維持すべく、「説明言表」という訳を用いたい(cf. *De Int.*, ch. 4. 16b26-17a8)。このことを背景に、‘horos’を

「定義形成句」と訳すことは適切であるように思われる。この訳は、次節において考察する A.5 におけるこの語についての説明によってさらに支持されるだろう。

アリストテレスによれば、定義の文一下位構成部分を分析することにより、定義を目標とする様々な企てを吟味する際に用いるための諸論点 (*topoi*) を提示することができる。アカデメイアの人々の説明言表と彼のものとを対照して、四つのプレディカビリアを導入する際に、彼は同僚たちに以下のことを思い起こさせる。すなわち「固有性や類、付帯性の議論はすべて諸定義 (*tous horismous*) との関連においても適用されるということを、われらは気づかずにいてはならない」(102b27-29)。ここでアリストテレスは「われら」と表現されているアカデメイアの人々に、その他三つのプレディカビリアに適用される議論が定義にも適用されると述べている。彼は、その他三つのプレディカビリアのそれぞれが、定義を吟味することについて有益であるいくつかのトポイの必要条件を形成するものとして提示している。「なぜなら、或るものは定義の下にある事物に唯一の仕方では属することがないということ…あるいは定義においてそのようなものと思われるものが類ではないということ、もしくは説明言表におかれた事物が属さないということを証明したときには、われらはその定義 (実践) (*ton horismon*) を覆したことになるであろう」(102b29-33)。付帯性の存在が否定されたり、類や対象に固有に属するものを捉えそこなったりすれば、成功した定義に到達することができない。これらの誤りは全て、定義を目標とした定義者の企てを損なう。重要なことは、この箇所が示しているように、「定義」という語が定義者の定義実践すなわち定義するという行為と、その帰結すなわち (例えば「人間は二足動物である」というように明らかになる) 定義命題の間で両義性を含んでいることである。

このような仕方では、アリストテレスは「本質」(*to ti ên einai*) および「定義形成句」(*horos*) という彼の新しい術語表現をその他三つのプレディカビリアから境界を定めるべく導入する。実際、「類」や「固有性」は双方とも「定義形成句」の「構成要素」(*stoicheia*) と言われている (120b11)。アリストテレスがこの句を導入する様式は、それが「固有性」の一部であり、後者を二

つのタイプに分割する機能を持つことを開示する。この仕方では、彼は「本質」(*to ti ên einai*)の役割を、その謎めいたフレーズの正確な意味がどのようなものであれ、それらプレディカビリアに関わる様々なトポイを提出することにより、特定することができる。

第五章 四つのプレディカビリアの理論

5.1 定義形成句の二つの構成要素

アリストテレスは「定義形成句とは何であるか？」(101b37) およびそのグループにあるその他三つのプレディカビリアの説明を提示すべく議論を進める。彼は述語「P」(名前か句のいずれか)が基体「F」について述語づけられる四つの仕方を指摘する。いわゆる「プレディカビリア」(語の述語づけ可能なタイプ)である。

「定義形成句」は、「(1)一方では本質 (*to ti ên einai*) を意味表示する説明言表である。だが他方では(2)それは名前の代わりに説明言表により与えられるかもしくは説明言表の代わりに別の説明言表により与えられる (*ê logos anti' onomatos ê logos anti logou*)。というのは、説明言表により意味表示される事物の或るものは定義され得るからである (*dynaton gar kai tôn hypo logou tina sêmainomenôn horisasthai*)。しかし、名前のみを与える人々は明らかに当該の事物の定義を与えていない。なぜなら、あらゆる定義は或る種の説明言表 (*logos tis*) だからである」(101b38-102a5, cf., *An. Post.*, 82b37)。

「固有性」は「或る基体について本質を明らかにしませんが、それにのみ属しそれと換位可能な仕方です語づけられるものである」(102a18)。

「類」は、種差をも含むが (101b8), 「種において異なる多くのものどもについて何であるかにおいて述語づけられるものである」(102a31f)。

「付帯性」は「これらのうちのいずれでもなく、すなわち定義形成句でも固有性でも類でもないが、しかし基体に属するものである」(102b4f), あるいは「それが任意の同一のものに属することも属さないこともありうるものである」

(102b6f)。

アリストテレスが四つのプレディカビアを導入する際には、表現に非対称性がある。定義形成句は「意味表示する」という意味論上の動詞と共に導入されるが、その他のプレディカビアは、世界における存在者の種類を特定するものとして提示される。この非対称性が生じるのは、「本質」を意味表示する説明言表に「定義形成句」というなじみのない名前をアリストテレスが考案したからである。彼は「類」等これらの語がアカデメイアにおいては既になじみ深いものであるとして、言語表現と世界においてそれに対応する存在者とを区別することなしに、その他の場合について議論することができる。さらに、われわれは各々の場合において対応する言語表現を直ちに提供することができる。例えば、「固有性」や「固有な説明言表」(140b10) は世界における当該の事物の固有性を意味表示する。他方で、「定義形成句」は本質を意味表示すべく想定されている説明言表を特定すべくその名前として導入される。このプレディカビアは新しいものであるから、その説明言表が対応する存在者を意味表示しており、指示の役割を持つことを指摘することは重要である。対照的に、彼はその他三つのプレディカビアを、アカデメイアの諸実践において既に確立された指示の用法をもつものと考えている。

「定義形成句」の説明において、その文は、(1)「一方では」(*men*)、(2)「他方では」(*de*) という構造を伴って、アリストテレスが「定義形成句」であるいかなる説明言表にも属する二つの特徴を特定していることを示唆している。そのような説明言表は本質を意味表示すべく想定されるが、それはまた名前（あるいは名前のような別の句）の代わりに用いられる。換言すれば、句が「本質」を意味表示するために、それは名前（あるいは名前のような別の句）の代理となり得る。私はこれを「交換原理」と呼ぶ。さらなる句による名前ないし句の交換は、それらが厳密に同じであることを示す。これらの表現の間の代理に関するアリストテレスの議論は、「というのも、説明言表[句]により意味表示される事物の或るものは定義され得るからである (*dynaton tina horisasthai*)」というものである。その交換は事物が定義可能であることの必要条件である。ペガサスのような架空の存在者の場合、名前「ペガサス」は

「半鳥半馬」という句により代理され得るが、その語が指示する対象が存在しない故に、定義はあり得ない。或る事物が定義可能であるためには、名前とそれが交換される句は双方とも同じ意味表示を持たねばならず、本質はこれらの語によって指示されなければならない。

5.2 意味表示と「定義形成句」の論理形式

この導入箇所において「定義形成句」を理解するため、われわれは二つの特定の問題を明らかにする必要がある。第一のものは意味表示の役割に関係しており、第二のものは定義形成句と定義の関係である。

定義形成句についてアリストテレスが導入的に説明していることは、三つの仕方で理解され得る。(1a)「P」という句が「Fであることは何であったか(本質)」の意味を伝達するか、(1b)「P」が世界におけるFであることは何であったかを指示するか、そうでなければ(1ab)「P」は「F」の意味を通じてFであることは何であったかを指示する。すなわち、問題は、説明言表が(1a)言語レベルに限られるのか、それとも(1b)世界における事物の存在様式を指示するのか、あるいは(1ab)表現の意味に基づき世界における事物の存在様式を指示するのか、いずれであるのかというものである。

アリストテレスが定義形成句に関するトポイを議論するとき、彼は名前や説明言表が事物に適用されることを想定している。定義形成句を覆すためには、ひとは「名前が適用されるものに説明言表が適用されることが決して真ではないということを示さなければならない」と彼は述べている(139a25f)。定義形成句は世界における事物の説明言表であるべく想定されているのである。

「意味表示する」という語の意味論的役割は、『トピカ』におけるさらなる所見を検討することにより明らかにされ得る。アリストテレスは、「固有性」という語のいくつかの側面を議論するさいに、名前や説明言表の意味表示の役割を説明する。ひとは同名異義的な名前や説明言表については、その不分明さの故に、用いてはならない。彼は次のように述べている。「ひとは固有性において与えられた名前のいずれもいくつかの意味で語られているかどう

か、そして説明言表全体が一つ以上のものを意味表示しているかを見なければならぬ。というのは、もしそうであるならば、固有性が正しく述べられていなかったことになるからである。例えば、「感覚する」は一つ以上のこと、すなわち、「感覚を所有する」とか「感覚している」ということを意味表示し、「自然本性上感覚すること」は動物の固有性をうまく提示してはいない(129b30-35)。この箇所からとりわけ明白なのは、「意味表示する」という語の主要な役割が当該の語の意味を提供するということである (cf. 139b19-31, 162b36f)。固有性ひいては定義形成句と考えられるためには、名前や全体としての説明言表が単一の意味を持たねばならない。それはまた、当該の語の確立された意味を通じて指示の役割をも持ち得る。すなわち、(1ab) 定義形成句「P」は「F」の確立された意味に基づいてFであることは何であったかを指示する。アリストテレスの意味表示の理論は、その役割が好ましい条件において意味と指示の双方を持つところの、語の意味の理論である。このことは後に A.9 の述定の理論を紹介するさいに、「意味表示」の機能が二つの言語表現を結ぶものと、それを媒介にして言語表現と世界の事物を結ぶものの二つがあることを述定と存在者の範疇の議論を通じてさらに明らかにされるであろう。

要約しよう。一つの言語表現名前「F」は、(特定の諸条件を満たすFが存在する場合に) その存在様式が「F」の確立された意味に基づいて指示される世界におけるFであることが何であったかであるところのFを意味表示する。「存在様式」によって私は「Fであることは何であったか」という句により指示されるところのものを意味する。つまり、自然的ないしは形而上学的理論においてさらに特定される存在の或る様式のことである。しかし、弁証術の新しい方法の課題が、事物の本質を知ることを要求することなしに、命題や問題を吟味する仕方を提供することであるのを忘れてはならない。目下の目的にとっては、表現が定義形成句として提示されるならばそれは特定の諸条件を満たすべきであるということを確認することで十分である。この仕方で、問われている本質が何であるのかをあらかじめ知るることなしに説明言表の十全性について議論することができる。

このことに基づき、われわれは定義形成句についての以下の特徴付けに達する。

(1ab') 説明言表「P」が事物Fの「定義形成句」と呼ばれるのは、(i) 「P」がFであることが何であったかを意味表示し、かつ (ii) 「P」がFを意味表示する名前「F」（もしくは句「F」）と交換され、かつ (iii) Fであることが何であったかが定義可能であるとき、かつそのときに限る。

アリストテレスは「定義形成句」という語および「何であったか」という句を分類用語として導入している。彼がそれらについて述べる時、ひとが他のプレディカビリアとの関連においてそれを定義すべく「本質を述べている」か否かということに彼は関心を寄せている。この文脈では、本質 (*to ti ên einai*) はさらに説明されるわけではなく、「定義形成句」という語が(何であれ)それを示すために用いられる。これが「何であったか」(*to ti ên einai*)の initial baptism である。

しかし、何故アリストテレスは本質 (*to ti ên einai*) をより詳しく説明しなかったのだろうか？ 一つの理由は、「本質が何であるかやそれがそれ自体においていかにあるか」(*Met.*, Z. 11. 1037a21, cf. 1025b28) を探求することは、存在の形而上学的研究の一部であり、弁証術の理論の構築においては要求されないということである。そうであれば、『トピカ』における「本質」の役割は単にその他三つのプレディカビリアから、それを区別することである。「本質」というフレーズは端的に定義形成句を特徴づけて区別するために機能する。実際、アリストテレスは定義形成句についてその他三つのプレディカビリアとの類似性や相違点を指摘することにより様々な論点を議論する。しかし、何故彼はそのような概念を必要としたのか？ その理由は、私が議論することになるように、彼が「Fは何であるか？」という問いに直接的に関わることなしに、ソクラテスの探求のいくつかの側面に従うべくその概念を用いることを望んだということである。もし、このようにアカデメイアの背景を念頭に置き続けるならば、彼の仕事をより良く理解することができるであろう。

5.3 定義形成句の交換条件およびその定義との関連

ここで「定義形成句」という語のいくつかの特徴を指摘し、「定義」との関係についての解釈を与えよう。「(2)他方でそれは名前の代わりに説明言表により与えられる」という文における「与えられる」という語は、「(人間は二足動物である)のような)何であるかを述べる定義全体を指示しているのではなく、名前の場所を占める説明言表を示している。

アリストテレスは A.7 において名前と句をめぐる同一性の三つのタイプを記している。彼は「同一性の最も厳密で第一の仕方は、「上着」(*himation*)が「外套」(*lōpion*)と同じであったり、「二足陸棲動物」が「人間」と同じである時のように、名前か定義形成句のいずれかによって与えられる時に、提示される」(103a26-28)と第一義的な同一性を述べる。この場合、交換原理により名前はその定義形成句に交換され得る。なぜなら、双方が同じ定義可能なものを、すなわち人間を意味表示するからである。「上着」と「外套」のような名前の場合には、意味表示されるものは厳密に同じものでもある。なぜならそれらの定義形成句が同じだからである。定義形成句が名前の代理となることは、それらが厳密に同じ事物を意味表示するならば、正当化される。

固有性の場合には、それぞれのものが基体と换位可能な仕方ですら述べられる当該の事物に属する複数の必然的な固有性があり得る(103a29f)。語句は常に同じものを意味表示するが、ここで名前との交換条件はこの場合には唯一の仕方ですら満たされるわけではない(cf. 140a33-b2)。「ソクラテス」と「座っている人」の関係のような付帯性の場合も、両語がいくつかの文脈において同じ事物を意味表示するとしても、交換条件は厳密には満たされない(103a31)。

アリストテレスは、「本質を定義したか…否か」(141a24f)に関するトポスを考察する際に、一つの定義において開示される事物にとって一つの本質がなければならないという結論を形式言論構築術的(*logikos*)議論から導く。彼は、「存在するものどものそれぞれにとって存在するものがまさにそれであることは一つある」と記している(141a35)。もし同じものについていくつかの定義があったとしたら、定義される対象は諸定義のそれぞれにおいて表わ

されるものと同じであったであろう。ここで私は「存在するものどものそれぞれにとって存在するものがまさにそれであることは一つある」を「本質」(*to ti ên einai*: 141a24) と同定されるものであると考える。

定義形成句は、対象の単一の本質を捉えることができる故に、名前あるいは名前のような句と交換され得る（交換の諸事例を参照されたい e. g., 110a 4-6, 140b32-141a2, cf. *An. Pri.*, A. 39）。したがって、定義形成句は成功した定義の文一下位構成部分であり、それは意味表示される事物に関するその名前と交換し得ると言うことができる。「定義形成句」は名前と交換することができ、本質を意味表示する説明言表にたいする一般的な名称である。このことは「定義形成句」(*horos*) が定義可能な事物を意味表示する表現である故に、定義される基体について述語づけられる定義形成句から成るものとして理解される定義(*horismos*)から区別されるべきことを示している。したがって、私は「定義形成句」(*horos*) を定義(*horismos*) の適切な構成部分であると考え。例えば、「人間」や「二足陸棲動物」が人間という定義可能な同じ対象を意味表示するならば、その定義形成句から形成される成功した定義は「人間は二足陸棲動物である」というものになるであろう。

「定義形成句」(*horos*) という表現は諸定義(*horismoi*) の特定の特徴を説明すべく用いられる。次の箇所を検討しよう。「より大きい度合いという観点からの吟味は、一つの定義(*horismos*) が二つの事物あるいはひとつの事物についての二つの定義(*horismôn*) と比較されるときには効力がない。というのも、二つの事物に一つの定義形成句はありえず、あるいは同一のものに二つの定義形成句(*horous*) はあり得ないからである」(154a8-11)。ここで、アリストテレスは理由文において表現される「定義形成句」という語を定義実践の或る特徴を抽出するために用いている。

定義形成句はまた定義実践の目標を構成する。つまり、定義形成句は成功した定義の観点から導入され、記述されている。アリストテレスは、次の箇所等において、時に、定義形成句そのものが覆される可能性を示唆する。すなわち「定義形成句は全てのもの [プレディカビア] の中でも最も容易に覆されるものであるが、しかし確立するのが最も難しいということは明らか

である」(155a27f, cf. 153a6-22)。ここでは、あたかもアリストテレスは「定義形成句」が常に成功していることを表す用語であることを否定しているように見えるかもしれない。しかしながら、この文は、その他三つのプレディカビリアと対比するというトポスとして定義形成句の諸特徴について語っているのである。プレディカビリアの理想的な本性を示して、定義形成句は全ての中でも肯定ないし確立することが最も困難であると語られている。特定の実践において、このトポスは事物を定義しようと努める者に警告するという役割を持つ。「定義形成句」によりアリストテレスは時として「定義形成句」と主張される説明言表に言及する（「定義形成句であると主張されるもの」(*ho lechtheis horos*)) (e. g., 139b36, 148a14. cf., 148a25)。そうであれば、言及されている特定の説明言表は、事実上、定義形成句である必要はない。「固有性であると主張されるもの」は固有性である必要はないように、「定義形成句であると主張されるもの」もまた本当はそうではないということが明らかにされることもある (132b32f)。

アリストテレスは、あるいは私がそう示唆したところでは、アカデメイアの人々が「何であるか」の彼らの探求において直面した諸困難を克服すべく、弁証術の新しい理論をその理論自体が持つ顕著な術語を用いて導入する。彼はこの文脈において自らの理論を構築するのだから、彼が諸定義についての（もしくは定義実践についての）アカデメイアの術語を彼自身のものとして引き継いでいることは、驚くにはあたらない。しかしそうであるにしても、アカデメイアの人々の実践は彼の新しい弁証術理論を基礎とする必要がある。「定義形成句」を導入することにより、彼は定義実践のより良い説明を提供すべく一步を踏み出したのである。

私の理解は定義を定義形成句から区別しない標準的な見解とは異なる。アリストテレスは、彼の「定義形成句の研究」において、定義が満たす「べき」(*dei*)「五つの」条件を述べている (Z. 1, 139a24-35)。定義は(1)その被定義項の普遍的かつ真なる述定でなければならない、(2)その固有な類と種差において被定義項をおかなければならず、(3)その被定義項についての固有な説明言表でなければならない、(4)本質 (*to ti ên einai*) を(1)(2)(3)に加えて述べなければ

ならず、そして(5)それをよく (*kalôs*) 定義しなければならない。これらの所見が示していることは、「定義形成句」が四つのプレディカビアの理論の文脈において理解されるべきであるということである。この箇所では三箇所(139a26, 28, 31)で見られる「なければならない」という語が明らかにするように、諸定義(もしくは諸定義実践)は、定義形成句とは対照的に、四つのプレディカビアのどれをも用いることができるし、したがって定義形成句を問題とすることに届かないこともあり得ることである。アカデメイアにおける定義実践はちょうど述べられた可能性のいずれにおいても問題となり得る。このことの故に、アリストテレスは「定義形成句」(*horos*)を導入して用いる必要があったのである。‘*horos*’ (定義形成句)は『トピカ』全体でおよそ六十箇所にあられる⁽¹³⁾。それらの箇所においては、新たに導入された「定義形成句」という語と、「定義」という語には、明確な差異がある。

アリストテレスが「定義形成句が何であるか」を述べる課題を他のより正確な諸論考に残していることを注記することは重要である。彼は次のように述べている。すなわち、「定義形成句が何であるか (*ti estin horos*) と、それがどのように定義されるべきであるのか (*pôs horizesthai dei*) を語ることは、別のより正確な探求に属する」(153a11f)。固有な定義の本性は、さらなる哲学的探求の主題である。議論を吟味することに専念する論考においては、「目下のわれらの目的に要求される限りで関わるだけで十分である」(153a12f)ということ注記すれば足りる。「別のより正確な探求」により、彼は『分析論後書』と『形而上学』に言及しているように思われる。それらの箇所において、彼は世界の因果構造を把握することを目標とした論証理論に基づく定義論を展開する⁽¹⁴⁾。

5.4 四つのプレディカビアはどのように選び取られたか?

全てのプレディカビアにより共有される特徴は、それぞれが定義との関係を持つことである。つまり「全てのもの [プレディカビア] は或る意味で定義的(*horika*)なものである」(102b34)。私はそれを、これら全ては定義として提示され得るが故にアリストテレスは全てのプレディカビアに「定

義的なもの（境界づけるもの）」という表現をあてている、と理解する。彼は定義を求め提示する文脈において「定義的なもの（境界づけるもの）」を導入する。

「美は適合である」というような所見を、「定義的なもの」(*horikon*)と置かねばならない。「感覚と知識は同一か、それとも異なるか?」という問いについても同様である。というのは、諸定義との関連で、われらは諸事物が同じものであるか異なるものであるかという問題の議論にとりわけ多くの時間を費やしているからである。要するに、諸定義と同じ方法の下にある全てのものを、「定義的なもの」と呼ばしめよ (102a5-10)。

管見では、プレディカビリアは定義の形成において何らかの仕方で適切であるが故に、選択されている (cf. 102b27-35)。プレディカビリアが当該の基体の定義を構成すると主張する者は誰でも、或る仕方では、それが定義される対象と同じものであることを主張しなければならない。プレディカビリアを伴う同一性のタイプを分類する際に、定義形成句はそれが「同一性の最も厳密な第一の仕方」(103a25f) に関わるものとして選好されるべきである。「類」は、例えば「人間は動物である」(cf. 102a35) という趣旨でその種とゆるい同一性を差し出す。「付帯性」もまた、「座っている生物、もしくは教養的であるものが、ソクラテスと同じものであると言われるときのように」(103a30f) 或る種の同一性を把握する。A. 8 における四つのプレディカビリアについての彼の議論の終わりでは、「付帯性」は基体の定義に含まれないがしかしなおそれに属しているものを意味表示するとして特徴づけられている (103b16-19)。

付帯性は「或る特定の時ないし或るものとの関連で固有性であることを何も妨げない」(102b21f) 故に、定義の候補として提出され得る。例えば、「戦闘において戦線から後退しないこと」は或る特定の文脈においては勇気の固有性になり得る (*Laches*, 190e, cf. 125b22, 151a2f)。勇気が「戦闘において

戦線から後退しないこと」と同一視され得ることがあるのだから、付帯性すら「定義的」と呼ばれ得る。とはいえ、提案された定義は付帯性に言及しているに過ぎないことが明らかになるなら、直ちに棄却される。「戦闘において戦線から後退しないこと」というフレーズが他の文脈で「臆病」とか「無謀」といったことに適用されることをひとが示し得るならば、これはせいぜい「勇氣」の付帯性に過ぎない。プレディカビアの選択が可能な諸定義の分類の文脈において理解されるならば、われわれはアリストテレスがここで「何であるか」のソクラテス的探求を改善しようとしていると理解することができる。当該の様々なプレディカビアを区別することにより、彼はソクラテスや彼の対話相手を悩ませた困惑のいくつかを避けることができる。

アリストテレスは「われらが枚挙した全てのものどもは、或る仕方では「定義的なもの」であるだろう。だが、われらはこの理由で一つの普遍的な方法を全ての場合に求めてはならない」(102b33-36)と述べている。彼の論点は再び定義の探求のソクラテス的方法とは異なる方向へ向けられる。アリストテレスは次のように続けている。すなわち、「というのは、それを見出すことは容易ではないし、それにまた見出されるのだとしても、着手している研究にとっては全く不明瞭であり有益ではないからである」(102b36-38)⁽¹⁵⁾。そのかわりに彼はプレディカビアのそれぞれの分割に一致する問いに、網羅的な応答を与える。四つのプレディカビアは「Fは何であるか？」という問いへの網羅的かつ相互に排他的な応答として与えられるのであるから、シンプルでひとしなみなソクラテス的「Fは何であるか？」という問いを免れることができ、むしろ定義としていかなる命題が提示される際にも用いられる述定の諸形式を吟味することができる。

私が示唆するのは、次のことである。すなわち、アリストテレスは、本質ないし定義のソクラテス的探求を分析し改善すべく弁証術についての彼の説明の一部として、プレディカビアの説明およびより一般的にはトポイの説明を発展させたのである。彼は「定義形成句」(*horos*)や「本質」(*to ti ên einai*)という新しい専門術語を、ソクラテスが彼の定義指向的探求において見たものを、ただし彼は適切な方法を欠いていたのであるが、捉えるべく与

えている。アリストテレスは「「Fは何であるか？」[という問い]なしに」(1078b26) 定義へのソクラテスの探求の諸側面を理解すべくプレディカビアの理論および諸論点 (*topoi*) の理論を展開することによって、ソクラテス的な「弱い」弁証術を強化しているのである。これらプレディカビアは、「何であるか」に関する形式的議論の方法 (*logikôs*) により「いかに語るべきか」を検討する際に、「Fは何であるか？」というソクラテス的な問いへの可能な応答として提出されるいかなる弁証術的命題についても、その網羅的な成分なのである (cf. 1030a27)。

第六章 「何であったか」 (*to ti ên einai*) の文法上の分析

ここで私は、ソクラテスの探究の背景に即して、句「何であったか」 (*to ti ên einai*) の文法上の分析を提示しよう。問い「Fは何であるか？」 (*ti esti F;*) に対する応答として、「Fが何であるか [ということ]」 (*to ti F esti*) が形式的な応答を提供する。言語上の術語表現に関する限り、「Fが何であるか [ということ]」 (*to ti F esti*) は「定義的」と呼ばれる四つのプレディカビアのどの一つとしての応答でもありうる。私の提案は表現「何であったか」 (*to ti ên einai*) は当該の事物例えばFそれ自身であることが何であるかということを示すべく「Fが何であるか」 (*to ti F esti*) の変容形として案出されているというものである。ソクラテスが対話相手から定義形成句以外の他の三つのプレディカビアからなる応答を受けた時、彼は彼の「何であるか？」 (*ti esti;*) の問いを用いて、ものそれ自体を問い直した。私は句「何であったか」 (*to ti ên einai*) はアリストテレスがソクラテスの基礎的な問い「何であるか？」への応答を捉えるべく用いた表現であると解する。それは、実際には、ソクラテスの探究の目標を捉えるアリストテレスの表現様式として機能している。

もし私の提案が正しければ、その表現が導入された哲学的文脈の一つの理解を基礎にこの句の説明に到達することになるであろう。実際、アリストテレスは「何であったか」 (*to ti ên einai*) という表現を定式化しているが、

ソクラテス的な問いに対する応答として機能すべく疑問文が定冠詞‘*to*’によって先行されている。もし私の提案が批判に耐えうとするなら、M. Loux がかつて指摘したように、「表現「何であったか」のどの説明も推測的なものに留まるに違いない」（註(1)参照）ということにはならないであろう。

研究者たちはこの句の(1)原形について、そして二つの Be 動詞 ((2) *einai* (3) *ên*) について議論してきた。(2)に関して、はたして「あること」(*einai*) は「述語の名詞用法」なのかそれとも「存在用法」であるかに関し論争がある。翻訳は前者においては「Fであること」となり、後者においては「Fにとってあること」ないし「Fがあること」となる。他の論点は(3)に関するものであり、なぜ未完了過去‘*ên*’が用いられているのかが議論されている。

最初に、なぜそしていかなる意味においてアリストテレスは Be 動詞の(2)不定句と(3)未完了過去を採用したかを明らかにしたい。その後、私の(2)(3)の読み に即して(1)原形を確定したい。「何であったか」が与格の名詞例えば「それぞれ」(*hekastôî*) や「定義されるもの」(*horizomenôî*) により補われている個所は数多くある (eg., 139a33, 153a15, 1022a9, 1029b20, 1031b30, 1035b16)。また時には属格の名詞により補われている (eg., 1032a2, b2)。しかし、与格が(2)「あること」の補語として仕えるかは明らかではない。むしろ、与格と属格名詞はその本質が問題になっている事物を固定することを示唆している。かくして、翻訳は「Fにとっての本質」または「Fの本質」となるべきである。

(2)「あること」が与格によって補われるべきことにはさらなる証拠がある。与格名詞が‘*to ti ên ekeinôi einai*’ (1031b7, 1030a2, 1029b27, 649b22) というような仕方で句の中に挿入される場合がある。これは「かのものであることは何であったか」と述語名詞用法に読むべきである。句(2)「あること」がその補語として与格名詞 F を伴って、名詞用法の「あること」の述語的使用の例として採用することの理由は二つある。

第一に、アリストテレスは「君であること」(*to soi einai*) (1029b14) のように定冠詞を伴う与格名詞を「あること」と共に用い、それを「何であったか」(本質)と交換可能なもの、同一のものを意味表示するものとしている

(1029b18, 1041b6)。アリストテレスは言う。「まず本質について幾つかのことをロギコースに語ろう。それぞれの事物の本質はそれ自身に即して語られるところのものである。というのも君であることは音楽的であること (*to mousikôî einai*) ではないからである」(1029b13-15)。多くの形式言論的な表現において、その句は本質を、つまり、ものそれ自体を意味表示する。アリストテレスは「君であることは音楽的であることではない」と言うとき、この動詞を存在的に理解してはならない。単純ないし存在用法はここでは問題になってはいない。むしろ、われわれはここで君であること（それは事実上実体の範疇に属する）と音楽的であること（それは性質範疇に属する）が同一であるかどうかを発見することに関わっている。

第二に、ソクラテス的な探究の視点から、ものそれ自体を問う様式は「ある」の述語名詞用法により与えられる。時折指摘されるように、もしソクラテスが「語‘F’は何を意味表示するか？」と「事物Fは何であるか？」の二つの問いのあいだに明確な区別をもうけていなかったなら、彼は当該の事物の存在と非—存在を考慮しなかったかもしれない⁽¹⁶⁾。アリストテレスにとって、探究の第一段階は語が何を意味表示するかを知ることであり、それを基礎にその対象の存在の把握を通じて本質の把握に至る。ソクラテスは倫理の領域において彼の「Fは何であるか？」の問いだけを尋ねたけれども、彼の探究の方法はなお謎めいた句「何であったか」の暗号を解読する試みの出発点を提供している。

未完了過去(3)‘*ên*’については幾つかの解釈が提示されているが、私はここでただちにこれまでの議論をもとに新たな解釈を提示する。ソクラテスは「Fは何であるか？」という表現以外に他の表現を持たなかったが、彼は事例を尋ねる問いと事物それ自体を尋ねる問いを判別していた。対話相手により事例が提示されると、ソクラテスは満足せず、今度は「一体」(*pote*)という強調の小辞を付加し、「Fは、一体、何であるか？」を新たに問う。アリストテレスもまた小辞「一体」(*pote*)を疑問文に取り入れて、事物それ自体を「一体、事物はそれ自体において何であると語られるのか？」により問うている(102b14)。W. Goodwin は通常小辞「一体」(*pote* または *ara*) を伴う未完了

過去‘*ên*’について次のようにコメントしている。「未完了過去‘*ên*’は(一般に‘*ara*’を伴い)、それまでに否定されたり見過ごされたりまた理解されなかった、話者ないし著者によりまさにそのようなものとして認知されている一つの事実 (a fact) を表現するであろう」⁽¹⁷⁾。私はこの未完了過去の使用を「弁証術的(問答の)未完了過去」と呼ぶことにする。この一つの事例は「魂にとってそれが不死であることは何であったかはこれまでそして今なお議論の対象である」というものとなろう。Goodwinの説明は疑問文にも適用されよう。疑問形式における「一体」(*ara*)の役割は時に「質問者の不安」を表現すると言われる⁽¹⁸⁾。ソクラテスが「Fは何であるか?」を問い、それに与えられた応答で満足しないとき、彼は、彼の対話者が見過ごしたまたは理解しなかったFそれ自体について再び問う。彼に与えられた答えの不満足が彼にあるとして、「Fは何であるか?」の問いを尋ねることにおける彼の最初の意図、即ち事物それ自身を再び問うという意図は未完了過去「あった」(*ên*)により表現されている。そのように理解すると、この未完了過去はソクラテスが、対話相手の応答のうちに見過ごされていた何ものかによく気づいており、終始事物それ自体を探索している事実を示すべく採用されている。だからこそ、この句は「何であったか」という変容された形式において用いられている。もしこれが正しいならば、未完了過去は「客観的な意味を提示し」、「無時間的で、分離した形相」を導入する、ないし個別者に先行する「基礎的かつ永遠的な存在」を表現するという類のこれまで提示されてきた形而上学的解釈を受け入れる必要はない⁽¹⁹⁾。

もし二つのBe動詞の私の解釈が正しいなら、この表現の(1)原形について一つの推測を楽しむことができよう。Rossは、この句は「血それ自身にとって血であることは何であったか?」(*ti ên autôî to haimati einai*;) (649b22)という疑問表現の「一般化」であると解した。Arpe, Frede/Patzigもまた句「何であったか」(*to ti ên einai*)における対象Fは、原形においては‘[*to*] *ti ên tôi anthrôpôi anthrôpôi einai*’ (「人間にとって人間であることは何であったか?」)のような定冠詞と別の与格を伴い二度現れたものであると示唆している⁽²⁰⁾。しかしながら、われわれの一般的なアプローチからすれば、「一体

Fそれ自身にとってFであることは何であったか？」(*ti ara ên autôi to F einai*;) のような疑問文において提示される問いの原形に焦点をあてるべきである。この様式において、われわれは事物それ自体についてのソクラテス的な問いに対する適切な応答を指摘するものとしてその表現を見て取ることができる。

われわれは今や句「何であったか」(*to ti ên einai*) を理解するより良い立場にいる。「何であったか」はソクラテスが問い「何であるか？」を尋ねることにおいて求めていた存在者である。ソクラテスは他の三つのプレディカピリアを用いた応答によっては満足させられなかった。彼の探究の共通の特徴は、彼が最初に「何であるか？」を尋ねるとき、彼はFの一事例を探しているのではなく、むしろFそれ自体が何であるかを探していると、彼が説明していることである。「ソクラテスの時代に展開した」何であったかを定義する最初の企ては「Fは何であるか？」という形式の問いの数を探究することに成り立っていた(642a26-28)。この問いを尋ねることにおいて実際に求められていたことは事例、即ち付帯性や「構成要素(類や種差)」(cf. 120b12)を提供することによっては与えられず、定義形成句を提示することによってのみ与えられる何ものかであった。ソクラテスは「何であるか？」の問いを挙げる以外に定義を求める他の方法を持っていなかった。アリストテレスは句「何であったか」を鑄造したのはソクラテスが彼の探究で求めていたものを指示すべくソクラテスの問答術を洗練させそしてその上に構築する彼の企ての一部としてであった。

この文脈において、次のことを注意しておくことは重要である。アリストテレスは彼の読者に「定義されるもの」(*horizomenon*) をめぐる一つのトポスを、つまりはたして「事物それ自体」または「類」(*auto ê kata to genos*) が定義において言及されているかどうかを、考察するよう促している(146a36-b12)。『トピカ』E巻においてもまた、そこでは固有性の様々なトポスが数えられるが、定義形成句は「事物それ自体」を明らかにすると語られている。アリストテレスは「一つの事物それ自体はあらゆる場合においてそれ自身であることを開示し、そして[それ自身]であることを開示するもの

は一つの固有性ではなく、一つの定義形成句である」と言う (135a10-12)。このように、『トピカ』における定義形成句はソクラテスが彼の「何であるか?」の問いの応答として求めていたものであると見て取られうる。この問いへの適切な応答は何であったかを意味表示する定義形成句である。

第七章 プレディカビリアと範疇の正当化

7.1 四つのプレディカビリアの演繹

本章において私は、『トピカ』A. 8 および A. 9 の分析に基づき、事物の「何であるか」へのソクラテスの探求にとって提起された特定の諸困難を解消すべく、アリストテレスがプレディカビリア (述語づけ可能なもの) の新しい体系を発展させていることを論じたい。アリストテレスは A. 8 において、全ての述定は四種の述語づけ可能なものから成り立っていると論じている (103b2f)。A. 9 において彼は、十種類の述定を導入しており、四種のプレディカビリアはそれらの述定において見出され得ると論じている。可能な全ての述定は、相互に排他的なこれら四種のプレディカビリアから成り立つこととなる。アカデメイアの伝統的な「何であるか」への探求を、述定と存在者に関わる十の範疇に分割することによって、アリストテレスは「何であるか」へのソクラテスの探求を洗練させ、その欠陥のいくつかを克服しようと企んでいる。

A. 8 において、アリストテレスは、「帰納」(103b3) と「演繹」(b7) の双方を通じて、四つのそして四つのみの相互に排他的なプレディカビリアがあるという「確信」(*pistis*) を提示している。いかなる命題も、四つのプレディカビリアの一つを含むこととなり (網羅性テーゼ (101b17f)), そしてそれらの中の一つのみを含むこととなる (排他性テーゼ (101b23-25)) (cf. 101a18f, 101b38, 102a31f, 103b15f, 153a15-21)。このことが正しければ、四つのプレディカビリアに基づく理論は定義の実践において導入されるものどもを含み、全ての命題を検討するための素材を提供することになる。

アリストテレスの帰納的証明は、ひとが諸命題や諸問題を一つ一つ見渡す

ならば、各々が四つのプレディカビアのうちの一つを含むことを見出すであろうというものである (103b3-6)。彼の演繹的証明は、三つの「…か…かのどちらか」という問いから成っており、それらの問いの範囲が順々に狭められる。アリストテレスは、一つの一般的な分割に基づき四種のプレディカビアがあることを演繹する。すなわち、(A)「或る基体のいなる述語も必然に基づいてその基体と換位可能であるかないかのいずれかでなければならない」(103b7f)。私はこれを「固有性条件」と呼ぶ。この条件により「定義形成句」と「固有性」の双方が導入される (cf. 101b19)。固有性条件 (A) はさらなる分割のための方法を準備する。換位可能である述語の場合に、次なる基準は、(i) 語が本質を意味表示するか否か、ということである。非一換位可能な述語の場合には、次なる基準は (ii) それが基体の定義のうちに含まれる語のうちの一つであるか否か、ということである。アリストテレスはこの基礎に基づいて、四つのプレディカビアを演繹している。

(i) と (ii) という基準の選択には共通の基盤がある。アリストテレスは以下の問いを念頭に置いている。「その述語は或る基体についてその「何であるか」において述語づけられるか？」(cf. 102a32, 153a18)。私はこれを「何であるか条件」(B) と呼びたい。固有性条件 (A) と何であるか条件 (B) を通じて、われわれは四つのプレディカビアの網羅性と排他性の双方を確かなものにすることが出来る。すなわち、定義形成句 ($A+B^+$)、固有性 ($A+B^-$)、類 ($A-B^+$)、付帯性 ($A-B^-$)⁽²¹⁾ である。A. 4-7 において、われわれは四つのプレディカビアの導入がソクラテスの「Fは何であるか？」への可能な応答の分析に基づいてなされることを見た。A. 8 においてアリストテレスは、四つのプレディカビアを枚挙して、何であるか条件の中心性を示している。彼は、どんな仕方であれ「何であるか」を語ることは四つのプレディカビアの一つを用いることになるということの証明を企てている。この基礎に基づき、彼は何であれ主題となる事柄に適用され得る議論の体系を確立すべく A. 9 へと進むことが出来る。

7.2 弁証術的議論の枠組みとしての述定の諸範疇

A.9において、アリストテレスは述定の範疇の理論を発展させることによって議論の種類を吟味する。その章の結論として彼は「したがって、これらそしてこれだけのものどもが、議論がそれらに関わりそしてそれらに基づいているところのものどもである」(103b39f, cf. 105a20)と述べており、そこにおいて問われているものどもは、諸存在者の異なるタイプに対応する述定のタイプである。『形而上学』や『ニコマコス倫理学』において「存在」や「善い」が多くの仕方で分類されるように、「議論」あるいはむしろそれらの構成要素であるところの「述定」はこの章において十に分類される。アリストテレスは弁証術的議論の種類を規定する目標をもって通常の多様な疑問文形式、疑問詞を考察することにより、四つのタイプ全てのプレディカビリアがそれらに属するところの述定の種類を区別する⁽²²⁾。

アリストテレスはこの章を以下のように始めている。

これら [A.8の議論] に続いて、先に言及された四つのものどもがそれらに属するところのものどもにおける諸述定の諸類が区別されなければならない。これらは数において十であり、何であるか、どれほどの量か、どのようにあるか、どのような関係か、どこでか、いつか、状態にあること、所有すること、能動すること、受動すること、である。というのは、付帯性や類、固有性、定義 (*horismos*) は常にこれらの述定のうちの一つ [の述定] においてあるであろう (*estai*) からである。というのも、これらから作られる全ての命題は、何であるか、またはどのようにあるか、またはどれほどの量であるか、もしくは他の諸述定のうちの何かを意味表示すからである (103b20-27)。

何人かの他の注釈者たちに同意しつつ、私は '*ta genê tôn katêgoriôn*' を「述定の類」と訳す⁽²³⁾。これには四つの理由がある。(1)その名詞 ('*hê katêgoria*') は、'*katêgoreitai*' (107a3, 109b5, 141a4, 152a38, 178a5, 181b27)⁽²⁴⁾ といったその動詞型がそうであるように、述定もしくは述語づけの行為を意味してい

る。(2)数え上げられた第一のものが「実体」ではなく「何であるか」であるという事実は、アリストテレスが、存在者の類を区別するというよりもむしろ、異なるタイプの問いに答えるために用いられ得る述定の種類を区別することに関心を寄せていることを示唆している(166b10, 16)。(3)「諸述定の諸類(単数形も同様)」と同一のフレーズをわれわれは他の箇所において見出す。それらの箇所の文脈が示唆しているのは、問題になっている類は、「善」のような単一の語が用いられる述定のタイプとして機能していることである(107a3ff, a18, 152a38, 178a6, *An. Post.*, 83b15, *Met.*, 1051a35)。ここでそのフレーズは言語レベルにおいて一つの意味を他の意味から区別する語の吟味に用いられる。例えば、「その食物はよい」という述定(命題)における「よい」は快樂を産出するというを意味するが、「その医術はよい」という述定において「よい」は「健康を産出する」を意味すると指摘されている。(4)類やクラスに言及するために英語(日本語)には category(「範疇」という専門用語があるので、われわれは字義通りに一致する '*hē katēgoria*')というギリシア語をこの仕方ですすみたいという気になる。しかし、そのギリシア語はそのまま完全に理解され得る、ちょうど、Joachim がその語を「存在を述語づけること」とか「存在の述定」などと訳しているように(*G. C.* 317b6)⁽²⁵⁾。文脈によっては、アリストテレスははっきりと「存在の類」と書いている(189a14, b24)。実際、'*tôn katēgoriôn*' というよりも '*ta genē*' というギリシア語が日本語の「類」「種類」とか「クラス」に一致する(cf. 165a38)。実際このような事情であるからこそ、アリストテレスは 103b20 において「述定の類(範疇)」について述べているのである。

アリストテレスは A. 9 において、実質的には、「どれほど多くの仕方です述定は語られるのか？」という問いを立てている。だが、「述定」(*hē katēgoria*)という表現は、行為／結果の両義性を持っていることに注意する必要がある。つまり、基体と述語の双方から構成される命題は、述語づけという行為に言及し得るしまた、その行為の結果に言及し得るのである。このことにおいて、それは「定義」という語が定義するという行為と定義的命題を結果すること(「人間は理性的動物である」というような命題)の双方に言及し得ることに

類似している。これら二つの意味を心に留めておくことは、以下の議論においては重要となる。

アリストテレスは、私が「述定の範疇 (CP)」と呼ぶ述語づけの十種を、通常の様々な疑問詞の形式を検討することに基づいて導入しているように見える。それゆえ彼は、いくつかの疑問詞の形式を、それらの文法形式を変えることなしに、あるいは範疇（もしくはクラスや、類、種類）を表示するための専門的な表現へと修正することなしに用いている。Ackrill が「そのギリシア語 [‘*poion*’ とか ‘*poson*’ といった語] は疑問詞としても不定形容詞としても用いられる」と指摘するように、われわれは文脈を考慮することなしには、どの文法形式にこの表現が属するのかを決定することができない⁽²⁶⁾。アリストテレスは議論の数と種類の確定を通じて弁証術を体系化するその試みのうちにあるのだから、これらの表現は疑問詞の考察から導かれているに違いない。だがしかし、疑問詞の様式の数に限られているので、行為主体もしくは事物／出来事の状態や行為、そしてそれがどのように受動しているかを表現する他のタイプの述定は最も可能な広い領域を表現しカヴァーするために、不定法動詞の形式において表現される。これらはすべて現在時制において論じられる可変な行為主体また事物に関わっている。これらのフレーズは「Fはどのような状況にあるか?」とか、「Fは何を持つか?」、「Fは何を為すか?」、「Fはどのように受動しているか?」にたいする略記なのである。

アリストテレスは述語づけの十の範疇の彼の選択を正当化すべく努めるが、それは彼が「常に」という副詞とともに単称未来時制を用いることによってそのことが示されている帰納的議論を提出することによりなされる (103b23-25)。人は常に他でもなく十種類の範疇のいずれかにおいて用いられている四つのプレディカピリアのうちのいずれかを見出すことになる、と彼は論ずる。というのも、これらの文一下位構成要素は常にこれらの述定の一つのうちに（そして他のいずれでもなく）用いられるからである。これが述定の十個の類の選択の基礎である。この文脈では述定が問題になっているので、アリストテレスは「定義形成句」ではなく「定義」(b24) という術語を用いている。というのも、当該の述定はその文の下位である句という構成

要素のひとつではなく、命題全体だからである。

アリストテレスは次にプレディカビリアと述定(命題)の関連を説明する。彼は「というのは、これら [四つ] を通じて作られる全ての命題は、何であるか、またはどのようにあるか、またはどれほどの量であるか、もしくは他の諸述定のうちの何かを意味表示すからである」(b25f)と述べている。もしちょうど文の下位に当たる四つの構成要素(プレディカビリア)やこれらを用いて作られた全ての命題(述定)が、述べられた十種のうちに当てはまるならば、アリストテレスは彼の範疇のリストの網羅性を示していたことになる。全ての命題はこれら十種の述語づけの一つのうちに分類され得るのである。

疑問詞についてのアリストテレスの選択は、恣意的ではない。なぜなら、それらは日常の用法において区別されるからである。これら十の問いに対する応答は、「何であるか」や「どのようにあるか」、「どれほどの量であるか」等を表示する。これらの問いについての彼の説明に立脚すると、アリストテレスによる述定の類形成の手続きは「有意味な主張のどの諸形式をわれわれはコリスコスについて形成することが出来るか？」と Düring が書いた際に想定していた以上に、より体系的なのである⁽²⁷⁾。というのも、アリストテレスは命題がどの問いに対する答えであるのかに基づき、全ての命題を十種のうちの一つに収容させることが出来るとしているからである。次節においてみるように、数え上げられた疑問詞のリストが網羅的かつ排他的なものであることは、これらの疑問詞に答えるべく導入された存在者の項ないし術語(例えば実体、性質そして時制のようなもの)のリストが疑問詞についてのこのリストに対応するその事実により確かなものとされるであろう。彼はここではただ文一下位構成要素として四つのプレディカビリアのみが存在する一方で、全ての種類の議論を構成している述定は十種類があるということを結論付けている。

7.3 述定理論に基づく諸存在者の範疇

アリストテレスの次なるステップは以下の通りである。

これらの議論から、「何であるか」を意味表示する者 (*ho to ti esti sêmainôn*) は時に実体を、時に性質 (どのようにあるか) を、そして時にその他の述定の或るものを意味表示する (*sêmainei*) ということは明らかである。というのは、或る人が彼の前に置かれており、そこに置かれているものは人間もしくは動物であると語るときには、彼は「何であるか」を述べており、実体を意味表示しているからである。だが、白いものが彼の前に置かれており、そこに置かれているものは白であるもしくは色であると語るときには、彼は「何であるか」を述べており、性質 [どのようにあるか] を意味表示しているのである。同様に、一キュービットの量のものが彼の前に置かれ、そこに置かれているものが一キュービットの量であると語るならば、彼は「何であるか」を述べ、量 [どれほどの量であるか] を意味表示しているのである。そして、その他のものどもについても同様である。そのようなものどものそれぞれのものに関して、もしそのもの [それぞれのもの] が (i) それ自体について語られるか、もしくはそれについてその類が語られるかのいずれかであるならば、その述定は「何であるか」を意味表示しているが、しかしそれ [それぞれのもの] が (ii) 何か別のものについて語られるとき、その述定は「何であるか」を意味表示しておらず、むしろ「どれほどの量であるか」、「どのようにあるか」、あるいは他の述定のうちの一つを意味表示している (103b27-39)。

アリストテレスは今や、どの存在者がそしてどれほど多くの存在者が、「何であるか」を語ることに携わっている者によって意味表示されるかを提示することへと歩を進める。彼は「何であるか」を語る者、すなわち「何であるか」を意味表示する者が、時に実体を、時に性質 [どのようにあるか] を、時にその他の述語づけの或るものを意味表示すると主張する。アリストテレスは、述定の範疇 (CP) についての先の議論の結論として、「諸存在者の範疇 (CE)」と私が呼ぶところの範疇についての新しいリストを提示しているのである。一般的な言い方では、範疇についての新しいリスト (CE) は「何であ

るか」はどれほど多くの仕方で語られるか？」という問いに対する彼の応答である。さらにそれは、目下の文脈においては、「Fは何であるか？」というソクラテス的な問いがそれらについて適切に提起され得るところの諸存在者は何であるか？」という問いへの応答なのである。

アリストテレスによる述定の類のリストが与えられている以上、同一指定する幾つかの語が諸実体やその他の性質等を意味表示することになるということは明らかである。「時に」によって示されるように、アリストテレスは、帰納的に、述定の範疇に依存しつつ何であるかがそれらに割り当てられることになるところの諸存在者の十種を数え上げている。このように、「何であるか」は多くの仕方でも語られ得るのである (cf. 1030a17)。

「変化」と、それもまた多くの仕方でも語られるのであるが、比較しよう (cf. *Phys.*, III. 1)。範疇に即して四つのタイプの変化があるように(実体的、性質的、量的、場所的变化)、「何であるか」として同一指定する十のタイプの述語づけがあることになる(実体的、量的同一性述定等)。アリストテレスの新しい体系において、「何であるか」を述べようとする各々は、諸存在者についての彼の十種類のうちの一つを用いることになる。つまり、或る実体は何であるかは、実体という語を用いて述べられることになり、或る量が「何であるか」は量という語を用いて述べられる等々、ということである。述定の十種類 (CP) が相互に排他的であり網羅的であるという事実は、諸種の同一性述語づけが配分されるところの諸存在者の数を規定する際に用いられる。

アリストテレスは述語づけの範疇 (CP) という彼の枠組みに基づいて諸存在者の全ての類 (CE) を分類しようとするのであるから、彼は何故諸存在者の類・範疇 (CE) が述語づけの類 (CP) に一致するのかを説明しなければならない。これを為すべく彼は三つの例を提示する。第一に彼は「人間」によって意味表示される存在者を実体 (*hē ousia*) と同定し、また「色」により意味表示される存在者を性質等というように同定する。コリスコスがカリアスの前に置かれておりカリアスがコリスコスを「人間」とか「動物」と述べる時、彼はそのもの (コリスコス) が「何であるか」を述べることによって、(述定の) 第一の範疇において述定を為している。この述定において、「人

間」や「動物」という語は世界における或る存在者 (*hē ousia*) を意味表示している。つまり、まさしくコリスコスが何であるかということである (103b22)。しかし、「人間」という語は二重の機能 [(S 1) (S 2)] を持っている。その語は、「コリスコスは人間である」という命題において (S 1) コリスコスが「何であるか」を語り、そしてそう語ることにより、(S 2) 世界において一致する存在者に言及指示してもいるのである。白色がカリアスの前に置かれており彼がそれは「白い」とか「色である」と語るとき、彼は (S 1) そのものが白いことを述べ、彼の用いる語が (S 2) 或る性質つまり事物がどのようにあるか (性質の存在論的範疇に属する存在者) を意味表示している。私はこれを「意味表示の二重機能 (dual function)」と呼ぶ。

意味表示の二重の機能は、「何であるかを意味表示する者は (*ho to ti esti sēmainōn*) 時に実体を、時に性質を、そして時にその他の述定の或るものを意味表示する (*sēmainei*)」(103b27f) という事態のうちに見られる。この箇所において、動詞「意味表示する」が二度登場するが、その一つはひとの言語行為を示す現在分詞 (*sēmainōn*) により与えられ、もう一つは現在時制 (*sēmainei*) により与えられる。「時に」(*pote*) が三回あらわれるので、現在分詞時制を持つ最初のフレーズは「Fとは何であるか?」という問いへの「何であるか」を述べることによる抽象的なレベルでの一般的応答を述べているはずである。つまり、それが何であれ「Fが何であるか」を述べることは時に世界における実体を、時に世界における性質を意味表示するということである。意味表示には二つ (S 1) (S 2) の機能がある。(S 1) は二つの言語表現 (例えば、名前「F」と「Fは何であるか?」という問いに応答する説明言表である) を結びつけるが、(S 2) は言語表現 (その名前ないし今述べた説明言表) と世界における事物とを結びつける。その時、ひとつの問いは、成功したケースにおいては、Fが何であるかを述べることが同時にこれら二つのことをなすかどうか、ということである。そのケースとは、「F」の意味を、その類「G」あるいはむしろ名前「F」と同じものを意味する定義形成句「D」を提示することにより、そして同時にこれをなすことにより確定することが、世界におけるFの何であるかすなわちGないし、「D」に

より意味表示される) 本質を意味表示するという場合である。私はそれを、成功している以上は、事物の「何であるか」を述べるという単一の言語行為が、当該の語の単一の意味を確定することを通じて世界における当該事物を意味表示すると理解する。すなわち、類の語ないし定義形成句は、例えば、当該事物の「何であるか」を語る事 [(S 1) 意味表示すること] により (S 2) 世界における実体等を意味表示する。これが単一の意味表示行為の二重の機能である⁽²⁸⁾。

続いて、彼のプレディカピリアの理論を基礎に、アリストテレスは述定の類 (CP) と存在者の類 (CE) の対応の理由とその状況をより一般的に説明している。上記の「人間」や「色」の例における「それぞれのもの」 (*hekaston*) という語は (i) それ自体についての述定の一部であるか、(ii) 何か別のものについての述定の一部であるかどうかである⁽²⁹⁾。述定のこの区分は網羅的である、というのも、一方、(i) 同一性述定は定義形成句か類により構成され、(ii) 異他述定は固有性か付帯性により構成されるからである。もし (i) 「そのもの」 (*auto = hekaston*) がそれ自体について語られるか、その類がそれ (*hekaston*) について語られるならば、その述語づけは「何であるか」の述定の範疇に属する。「何であるか」を述べることには十種の異なる仕方があり、それらの各々に別々のタイプの存在者 (実体、性質、量等) が対応することになる。対照的に、語が (ii) 別のものについて語られるときには、当該の述定は後者が何であるかを示さず、どのようなか等を示す⁽³⁰⁾。例えば、「白い」が「熊」に述語づけられるときに、それは熊がどのようなものであるかを指摘する。固有性あるいは付帯性が別のものに述語づけられるときには、その述定は何であるかを示さず、むしろ何か他の存在者の範疇を、それが所有する述定のその他九種の範疇のうちの一つに一致することによって、意味表示する。

しかしながら、実体と他の存在者の範疇との間には非対称性がある。或る実体は、述定の役割を果たし得ないので、タイプ (ii) 異他述定においては用いられ得ない。或る人が「獅子鼻は動物である」と述べるならば、「動物」は獅子鼻が何であるかも、どのようにあるかも、また獅子鼻に属するいかなる

範疇をも意味表示し得ない。実体術語はタイプ (i) 同一性述定においてのみ用いられ得る一方、他の語はタイプ (i) と (ii) の双方の述定において用いられ得る。諸実体は決して諸存在者のその他の範疇について述語づけられ得ないのである。ただし、その他の諸存在者はそれらについて適切に述語づけられる。

アリストテレスは実体の範疇 (CE) が「何であるか」の範疇 (CP) に一致すると主張することが出来る。なぜなら、実体術語はタイプ (i) の述定において用いられる得るのみである語に限られる一方、その他全ての語はタイプ (i) および (ii) の双方の述定において用いられ得るからである。実体にあたる諸語が果たす唯一の役割は、「Fは何であるか？」という問いへの応答においてFが何であるかを特定することであるから、実体にあたる諸語はFがどのようにあるかやそれがどれほど大きいかといったことを述べるべく用いられ得ない。対照的に、他のタイプの語は何であるか（或る量等）やどのようにあるか、どれほど大きいかも述べる事が出来る。実体にあたる諸術語は「Fは何であるか？」という問いに回答する際に用いられ得るのみである一方、その他全ての諸語はこの問いに回答する際にもその他の問いに回答する際にも同様に用いられ得る。さらに諸実体は、その他全てのタイプの存在者 (i) と (ii) のタイプ双方の述定において述語づけられ得るように、タイプ (i) 同一性述定においてのみ述語づけられ得る唯一のタイプの存在者であることになる。

実際、『形而上学』Z.1において、アリストテレスは存在のロギコスな分析を遂行することにより、実体の存在論的優先性を確立した実体と他の存在者の存在論的非対称性を確立している。Z.1の論述は「何であるか」を述べることの二重機能に訴えそして実体と他の範疇の述定の非対称性に訴えており、『トピカ』A.9における当該個所を展開するものであると言うことができる。アリストテレスは言う。

「存在」は多くの仕方で語られる。…というのも、一方それは (S 1)
「何であるか」をそして (S 2) 或るこれ (*tode ti*) を意味表示しており、

他方、それは(S 1)「いかにあるか」、または「どれほどの量であるか」、またはこの仕方です語づけられる他のものどもの「それぞれ」を意味表示しているからである。「存在」はこれだけの仕方です語られるので、「何であるか」がこれらの第一のものであって、まさにこれが(S 2)実体を意味表示すること明らかである。なぜなら、われらが(S 1)「これはいかにあるか? (*poion ti tode;*)」を語るとき、われらは「善い」とか「悪い」とか言い、「三キュービット」とか「人間」とは言わない。しかし、われらが(S 1)「何であるか」を言うとき、われらは「白」とか「熱い」とか「三キュービット」とか言わずに、「人間」とか「神」と言う(1028a 10-18)。

ここで『トピカ』A.9と関連する二つの点だけを挙げる。第一に、(S 1)「何であるか」を語ることにより意味表示される或るこれ(*tode ti*)は(S 2)実体である。問い「カリアスは何であるか?」に対し、「彼は(S 1)人間である」と言うことにより応答するとき、われわれは同時にカリアスにより例化されている(S 2)或るこれを指示している。アリストテレスは同一性述定が第一義に実体に属することを指摘することにより、実体の優先性を主張している。彼は「何であるか」がこれらの第一のものであって、まさにこれが(S 2)実体を意味表示する」と語る。彼は問い「何であるか?」に対する一般的かつ抽象的な応答であると想定されている「何であるか」の領域を「まさにこれが実体を意味表示する」という従属節を加えることにより限定している。この限定により、彼は「何であるか」の使用を実体の場合にのみ限定している。他の存在者は、実体の同一性が第一義に固定される限りにおいて、「これ(*tode*)はいかにあるか?」のように「これ」について述語づけられる。

アリストテレスは、疑問詞のタイプとそれらの対応する術語のあいだの区別に訴えることにより、何であるかと実体のあいだの連関を説明する。この引用文において、彼は差し向けられるべき本来的な疑問詞を対応する存在者の術語の類に応じて分類している。われわれは「人間」や「神」のような実

体語について言及することにより、「これはいかにあるか?」という問いに答えるべきではなく、「白」とか「善い」等の他の種類の術語に訴えて答えねばならない。問い「これは何であるか?」に対し答えることは第一義的に実体に向けられる。というのも、実体であるところの「これ」が同一性述定により固定されないなら、性質や量などの他の存在者は基体「これ」について述語づけられえないからである。

『トピカ』におけるように、この箇所においても、述定は疑問文の形式に即して範疇へと分割される。彼がここで問うている「Fは何であるか?」という問いに応答する第一範疇を意味表示する述定は、神や人間のような実体を意味表示する。さらに、諸実体は「Fは何であるか?」というもの以外の問いに応答するためには必要とされないだろうが、他の種の存在者は他のタイプの疑問文に応答すべく要求されることになる。この章は、『トピカ』A.9がそうであるように、「Fは何であるか?」という問いを発する際には、存在者の他の範疇が言及され得るということを確認する。アリストテレスは「われらがその量や性質が何であるかを知っている時のみこれらの事物のそれぞれを知っているのであるから、われらは性質や量、あるいはどこにあるということを知るよりも、むしろ或るものが何であるか、例えば人間が何であるかとか火が何であるかということを知るときに、最も十分にそれぞれの事物を知っていると思う」(1028a36-b2)と述べている。しかし、ここでも、(S 1) 性質が何であるかを示す際、ひとは (S 2) 世界における当該の性質を意味表示する。これら全てのケースにおいて、アリストテレスは問われている語と同じものを (S 1) 意味表示する別の句を作り出すことと、世界における或る対象を (S 2) 意味表示することを比較すべく、意味表示の二重の機能を活用している。この様式において、『形而上学』Z 1において、彼は存在論的に (i) 何であるかの述定と (ii) 述定の他のタイプの非対称性を確立している。彼はまた述定の類 (CP)、とりわけ何であるかと存在者の類 (CE)、とりわけ実体のあいだの対応を確立している。

第八章 定義形成句と定義に関わる幾つかのトポス

私は最後に定義形成句と定義に関わる幾つかのトポス (*topoi*) を考察する。第一に、「種差を見出すこと」と「類似性を吟味すること」は事物が何であるかの探求において有益な「道具」である (105a21-25)。種差を発見することはわれわれにそれらと当該の類を把握すべく要求しているの、定義において「第一に置かれるべきもの」は「類」でなければならない (107b39f, 142b29, cf. 132a17-21)。類似性の諸ケースの探求はこの目的に有益である。海におけるおだやかさと大気における無風は双方とも「休止」の類のケースとして看做されうる。アリストテレスが「定義に関わるひとつとは通常この原理のうゑに形成する」と言うとき、彼はアカデメイアにおける定義実践の習慣に言及している (108b28)。

一旦、ひとが類を措定したなら、次になすべきことは種差を発見することである。例えば、正義が徳の類のなかで勇氣とは異なるその様式を考察しなければならない。当該の種差の発見は「同と異」に関する推論の形成に有益である。それはまた「それぞれの事物が何であるかの認識」にも有益である (108a38-b6)。アリストテレスは語る、「われらはそれぞれの事物の実体の適切な説明言表をそれに適切な種差により分離した」(108b4-6)。分割法は類似と差異への探求に基づいている。それは定義を形成すべくこの実践を用いる帰納の仕事である。

一つの重要なトポスは、はたして一つの種差が「類の種差」か「主題に固有な種差」であるかの問いに関するものである (143a29-b10)。人間の場合に、種差 (eg. 陸棲, 二足) は種に属するそれら (eg. 文法能力) よりもより効果的に本質を意味表示する (132a1-9)。前者は類動物を、当該の定義形成句を分節することを可能にすることにより、差異化する。ここで、われわれはアカデメイアにおいて獲得された「習慣」(108b6, b29) である分割法理論を基礎に形成される定義を見いだす。

アリストテレスがそれにより定義形成句の特徴を固有性のそれから区別す

るトポス、つまり付加と取り去りの方法を検討することは有益である。彼は言う、「付加される事柄が与件の主題に固有 (*idion*) ではあるが、しかもそれが取り去れるとき、それでも残された説明言表もまた固有でありそして実体を明らかにするかどうか検討せよ。例えば、人間の説明言表において、「知識を受け入れうるもの」という付加は余分である。というのも、それを取り去れ、そしてなお説明言表は固有でありそして実体を明らかにする。一般的に言って、すべてのものは、その取り去りのうえで、残りのものが定義される項を明らかなものとして残す場合には、余分なものである」(140a33-b2, cf. b7: *horos*)。すなわち、複数の固有性が存在しうる一方で、当該の対象については単一の本質が存在するのでなければならない。「换位可能性」(102a18)としての「固有性」の特徴は単に、もし固有性Xが存在するなら、そのときそれは特定の主題Yにおいてのみ存在するということを意味している。XがYにおいて存在するのでなければ、それは存在しないということである。换位可能性はYはXがそれに属する唯一のものでありそしてXはYにだけ属するものであるという場合において成立する。他方、本質の特徴はもし本質Zが存在するなら、そのときその本質がZであるところの事物Yが存在するそしてその逆も真、つまりZが存在するのはYが存在するときかつそのときに限る、ということにある。

さらに「うまくまたはそうでなく」(*kalôs ē ou kalôs*) 事物を定義することに関する一つのトポスを吟味しよう。それをうまくするためには、ひとは「より先でありまたより可知的である諸項を媒介にして」事物を定義しなければならない(141a29)。この段階で、アリストテレスは二つの定義条件、端的な先行性と端的な可知性、を導入している(141a33, 142a7f)。それらの基礎のもとに、同一事物について複数の異なる諸定義を持つことはできないということを見て取ることができる。というのも、他の諸固有性に先行するただ一つの本質があるからである。これが「存在するものどものそれぞれにとって存在するものがまさにそれであることは一つある」(141a35)という主張に含意される存在論的コミットメントである。本質の一性はもし提供される定義が「うまく語られる」ことがありうる場合に要請されているものである。

『トピカ』においてこれらの定義条件は分割法理論の伝統的な枠組みの内側において機能している。端的な可知性の概念は三つの事例により例証される。第一のものは、算術から採られており、単位（一）は可知性において数よりもより先なるものである。第二のものは、幾何学から採られており、ちょうど線が平面よりもより先でありまた平面が立体よりもそうであるように、点の可知性は線のそれよりもより先である。第三は、言語学からの事例であり、字母は音節よりも可知性においてより先である（141b6-8）。アリストテレスが「単位はあらゆる数よりもより先でありまたそれらの原理である」（141b8）という発言を、これらの場合において可知性における先行性の理由として語るとき、これらの項目のあいだの先行性関係を注記している。構成上より先であるものは端的に可知性上より先である（141b5f）。

アリストテレスは論証理論と分割法理論のあいだに説明の先行性と可知性に関し平行性を見ている。彼は言う、「われらは事物を知るにいたるのは、何か任意の項を取り上げることによってではなく、論証においてなされるように、より先かつより可知的であるそのような項を取り上げることによってである。というのも、あらゆる教授と学習に関してそうであるからである」（141a28-30）。ここで彼は、分割法による定義において用いられるより先かつより可知的特徴の概念は論証において打ち立てられるものと調和のうちにある。実際、分割法に基づく定義は当該の対象についていかなる因果論的な語りを含むことがないので、定義の要素間における当該の先行性を打ち立てるべく論証理論からの付加を要請するように思われる。

『分析論後書』とりわけ B. 10 において、アリストテレスは『トピカ』の分割法に基づく定義タイプの内側における諸欠陥を克服すべき企てにおいて論証に基づく定義の新しい理論を展開した。アリストテレスはそこで分割法に基づく定義のタイプは、もしそれらが当該の対象の存在とその因果論的基礎双方を打ち立てる論証に依拠する場合にのみ定義として成功しようと論じている。しかし、彼は分割法と論証に基づく探求は同じ知識を生み出すという理念を保持している。かくして、例えば、雷が何であるかの説明言表は類「音響」と種差「雲間で火が打ち消されること」により与えられるでもあろう。

この種差は論証において把握される因果論的基礎つまり「なぜなら火が雲間で打ち消される故に」(94a4f)を反映するであろう。彼はこの例に基づき「同じ説明言表が別の仕方により語られる、最初に一つの連続的な論証としてそして第二に一つの定義として」と述べる(94a6f)。定義のこのタイプは「論証とは語順において異なる、何であるかの一つの推論」と呼ばれる(94a12, cf. 153a14f)。

『トピカ』においては、これらの定義条件は一つのトポスの部分に留まる。対話における文脈に応じて、「状況が要求する場合」(142a13, a33)、「彼らにとって可知的である術語により説明言表を提示する」ことは認可されている(141b18f)。例えば、平面は可知性の秩序において端的に立体よりもより先であるけれども、「平面」を「立体の限界」として定義することは可能である(141b22)。アリストテレスは続いて注意している、「しかしながら、ひとはこの仕方では定義する者たちは彼らが定義するものの本質を知ることができないということを感じずにはならない、もし同じものがわれらにとつとそして端的にもより可知的であるということが起こるのでなければ」(141b23-25)。この注意は二つのことを含意する。第一に、アリストテレスは哲学者として彼の弁証術の理論を構築するさいに、端的により先なるものに基づき定義上の秩序の存在にコミットしている一方で、彼は弁証家がこの存在論的仮定に依拠することなしに吟味を遂行することができることを承認している。第二は、「われらに可知的であるもの」と「端的に可知的であるもの」は場合によっては同一のものを指示することができることである。その思考が「より一層正確である者たち」(*akribesterois*)には、感覚—知覚の対象から遠い何ものかとはより一層可知的なものである(142a3, 141b10)。これは端的により可知的である何ものかにとつとはわれわれにとつとより可知的であることがありうるということを示している。しかし、単一な本質が存在する限り、先行性は構成上決定されねばならない。

『トピカ』は類一種樹形図により定義される枠の内部において諸命題を確立また覆しする様式に関わる幾つかのトポスを提供している。弁証術の訓練においては、事物の因果論的構造の探究は不適切である。個体から普遍に移行

する帰納において事物の因果構造を開示することはその仕事ではない(156a4-6)。

今や、『トピカ』における表現「何であったか」(*to ti ên einai*)の諸特徴を要約することができる。(1)それは形式的、一般的(*logikos*)次元において、事物を分類しそして成功した定義において把握されるものを特徴づけることを可能にする。(2)それぞれの事物Fにとって、Fそれ自身と同一である単一の項目を抽出する。(3)それは「定義形成句」において指示される存在の様式を抽出する。(4)類と種差を媒介にした分割法理論により定義されるであろう。しかし、(5)それは、定義形成句と同様に、弁証術よりも一層正確な別の探究により研究されるべきものである。

アリストテレスは、『トピカ』における「本質」(*to ti ên einai*)の系統だった特徴づけにおいて、探究のソクラテス的な方法を念頭においている、そのように私は論じた。実際、彼はソクラテスが彼の弁証術において尋ね求めたものを提示すべく「本質」と「定義形成句」の概念を導入している。プレディカビアの理論はソクラテス的探究を洗練させそして改善すべく構築された一つの理論の部分である。この計画は句「何であったか」と「定義形成句」の最初のアリストテレスの導入の文脈を形成している。ひとたび、これらの言語諸表現をそれらの適切な文脈において見るなら、われわれは、なぜそれらが、彼の形而上学的議論において、引き続き形相のような存在者に適用されたかを理解することができる。

終章 結論：一つの見通し

『トピカ』の一つの仕事は或るものが何であるかの一つの許容できる探究の理論を展開することである。それは弁証術の實踐において提示された諸命題を確立した覆す過程を容易にすべく立案されている、多くのトポスを輪郭づけることにより、このゴールを達成する。トポス理論はアカデメイアから受け継いだ分割法理論を採用している、そして帰納により把握される類と種により定義される論理的空間において作用する。帰納は、既に指摘したよう

に、事物の因果構造を開示することにおいて限定的な役割を演じる。実際、たとえ帰納が存在の秩序において帰結よりもより先である根拠をたまたま把握するにしても、それはそれをその根拠として把握することはできない。というのも、それは論証を要求するからである。例えば、仮に「人間」は分割法により「可死的、有足の、二足の、無翅の動物」(92a1)として適切に定義されているとしよう。分割法は、帰納に基づき、この場合に根拠をヒットすることがあるにしても、それは「二足」と「無翅」のどちらが因果的により先なるものであるかを決定することはできない。分割法に基づく「定義形成句」においては、「何故そうであるのか？」が常に問われうる(91b39)。そのような諸定義は定義項の構成要素の一性を説明することができない、たえずすべての当該の構成要素が、実際に、提示されていても(cf. 92a29-34, 92b19-25)。

『分析論後書』において、論証理論は分割法理論の限界を乗り越え、より先なるものを打ち立てる説明論上の諸条件の輪郭を提示している。われわれは当該の因果論的構造を把握することにより知識を獲得する。この様式において、プレディカビリアと範疇の理論に基づいた本質の『トピカ』の説明は論証理論に基礎づけられた因果論的定義を使用することにより補完される。私の提案は伝統的な何であるかの分割法に基づく探究は、アカデメイアにおける実践に基づき『トピカ』において提示されているが、後に『分析論後書』における因果論的定義を特徴づけるべく使用されている術語を提供しておりそしてすべての定義にとって適切な目標、すなわち、問題になっている事物は何であったかを語ることを定式化しているというものである。アリストテレスは『形而上学』において、彼が彼の論証理論を呼び起こす術語において彼の質料形相論の内部で「本質は何であるか？」の問いに答えるべく探究したとき、この計画をさらに遂行したのである(*Met.*, E. 1, 1025b29)。この段階で、形相は本質と同定され、そしてさらに探究される(*Met.*, Δ. 2, 1013a27, Z. 7, 1032b2-4, *Phys.*, B. 3, 194b27)。しかしながら、彼の引き続きの本質探究のすべての基礎は『トピカ』において設置されたのである。

註

- (1) T. Wagner/C. Rapp は近年「この概念の正確な再構成はいまだになお論争の対象である」と述べている。T. Wagner/C. Rapp, *Aristoteles Topik*, S. 276 (Reclam, 2004)。M. Loux は「この表現‘to ti ên einai’の起源とその正確な意味をめぐる文献上多大な議論がなされている。しかし、この表現のどの説明も推測的なもの (conjectural) である」と述べる。M. Loux, *Primary Ousia An Essay on Aristotle’s Metaphysics Z and H*, p. 73f. n. 5 (Ithaca N. Y. 1991)。J. D. G. Evans は何ら根拠なき次の推測をなしている。「‘to ti ên einai’は第三人間論のパラドクスを回避すべく通常の‘ti esti’の表現の変わりに導入された、新規な定式である」。J. D. G. Evans, *Aristotle’s Concept of Dialectic*, p. 112 (Cambridge 1977)。私はこの表現の文脈に基づいた解釈を提示したい。先行研究者たちはこの句が形相の概念により解釈されると提案してきた、しかしこれはこの表現が導入されている文脈を無視している。Ross は「ロゴスと‘to ti ên einai’は常に形相と同義 (synonym) なものとして用いられている」と述べている。D. Ross, *Aristotle*, p. 74 (Oxford 1923)。S. Mansion, J. Owens 等も Ross に従っている。S. Mansion, ‘La notion de matière en Métaphysique Z10 et 11’, *Étude Sur La Métaphysique D’Aristote*, p. 188 (Paris 1979), J. Owens, *The Doctrine of Being in the Aristotelian Metaphysics*, p. 183 (Toronto 1963), Cf. R. Sorabji, *Necessity, Cause, and Blame Perspectives on Aristotle’s Theory*, p. 213 (London 1980)。
- (2) 一方‘logikōs’ という方法による考察はエレア派, ソクラテスそしてプラトンにより展開されたが, 他方‘physikōs’ という方法による考察はイオニアの自然学者により経験的なデータへの言及により支持される科学的な主張として展開された。過去には, 語‘logikōs’は‘dialectically’(弁証術的に)と訳されたが, 近年はより適切に‘logically’(論理的に)と訳されるようになっていた, ただし Burnyeat は‘logically’は「翻訳というよりも, むしろ字訳 (a transliteration) である」と注記しているが。(M. Burnyeat, *A Map of Metaphysics Zeta*, p19, 89 (Pittsburgh 2001), cf., D. Charles, *Aristotle on Meaning and Essence*, p. 286. n. 25 (Oxford 2000))。アリストテレスが論理学 (Logic) を打ち立てたとき, かれはロギコスという様式によりそれを構築したことは疑いない。しかし, その方法それ自身はそれが存在主張をなしかつ支持しようという事実に示されるように論理学より広い適用範囲を持っている。こうして, 例えば, アリストテレスは本質についてロギコスの様式により論じそしてそれぞれの事物にとって単一なものが存在しなければならず (*Top.*, Z. 4) そしてそれは第一義に実体に属すると主張している (*Met.*, Z. 4-6)。私は‘logikōs’の正確な意味は「矛盾律つまり無矛盾の原理に則りそして同や異なるなどの一般術語に基づき形式的な議論の

方法」というような表現により伝達されると理解する。

私は『アリストテレスと形而上学の可能性—弁証術と自然哲学の相補的展開—』（勁草書房 2002）序章「アリストテレス哲学における方法論—ロギケー（形式言論構築術）の展開—」においてアリストテレス全集において見出される形容詞‘*logikos*’（19回）とその副詞表現‘*logikôs*’（13回）すべてを吟味した。私の結論はロギコスな方法は価値ある哲学的方法であり、アリストテレスにより決して「軽蔑的に」（pejoratively）理解されることはなかったというものである。軽蔑的な読みは例えば D. Ross, *Aristotle Metaphysics II*, p. 168 (Oxford 1924), Le Blond, *Logique et Méthode chez Aristote*, p. 205 (Paris 1939)に見られる。「神学」（*theo-logikê*）や「天文学」（*astro-logikê*）が *logikê* を語尾に持つことは偶然ではない（46a19f, 291b21, 1026a19）。さらにロギコース（*logikôs*）による探求は単に概念分析や論理的推論に限定されるものではなく、ひとは「いかに語るべきか」（*pôs dei legein*）に基礎づけられる議論に基づき、世界における事物は「いかにあるか」（*pôs echei*）についての主張をなしうるのである。（私は『形而上学』Z. 4-6 は全体としてロギコースという方法により論じられていると主張する Burnyeat と M. Wedin に同意する（Burnyeat, op. cit., p. 22ff, M. Wedin, *Aristotle's Theory of Substance*, p. 201 (Oxford 2000)）。さらに、無矛盾の原理それ自身は「同」と「異」への言及なしに理解できないロギコスな概念である。このことは議論のどんな項目も様式ロギコースにより一般定な次元で分析されうることを示している。

方法‘*logikôs*’の役割は時に「概念分析」に限定されてきたが、私はそれが「単に言葉上（verbal）のものではない」とする Burnyeat に同意する（Burnyeat, op. cit., p. 20）。「概念分析」という解釈の例として、G. E. L. Owen, ‘Tithenai ta phainomena’, *Logic, Science and Dialectic*, p. 240 (p. 85, 1961) (Duckworth 1986), E. Berti, ‘Does Aristotle’s Dialectic Develop?’, *Aristotle’s Philosophical Development*, ed. W. Wians, p. 114 (Rowman and Littlefield Pub. 1996)）。Frede & Patzig は‘*logikôs*’を「内容ある、科学的なものとは対照的に言語的、概念的な探求」として特徴づけ、そして言う、「それらは内容ある考察を媒介にして補われねばならない」。（Frede/Patzig *Aristoteles Metaphysik Z Kommentar*, S. 59 (München 1988)）。しかしながら、方法「ロギコース」と他の諸方法を「概念／内容」という区別として理解することは誤解を招く。或る箇所においては、アリストテレスはロギコスな議論とピュシコス（自然学的）な議論双方により同一の結論に到達しようと論じている（e. g., G. C., I. 2, 316a5-14, *Phys.*, III. 5. 204b4-11, *G. A.*, II. 8, 747a24-749a6）。同様に、「ロギコース」（*logikôs*）と「アナリュティコース」（*analytikôs*）（analytically）という方法も同一の結論のために論じうる（84b1f）。このことはロギコスな議論は単に概念分析に限定されているのではないこと、しかもそれは常に一つの異なる「内容ある」議論の様式によって補われる必要があるということではないことを含意している。

次の事例を考察しよう。アリストテレスは種ラバ全体が不妊であるという結論に対する自然のおよび形式的な論拠双方を提示している (G. A., II. 8. 747a24–748a7)。彼は二つの対立する普遍概念「同」と「異」に訴え「一つのロギケーな論証」(747b28)を提示している。この証明における彼の仮定は(1)同一種のオスとメス (例えば xx) からは同一種 (x) のオスとメス双方が生まれる, そして(2)異なる種 (xy) からは種において或る異なるもの (z) が生まれる, である。(1)の故に, x は xx から生まれる, (2)の故に z は xy から生まれる。さて, ラバは(1)の故に別の種を生むことができない。ラバはラバを生むことができない, なぜならラバは事実上種において異なる馬とロバの産物であるからでありまた(2)が前提されていたからである。かくして, ラバはラバをまたは動物の別の種を生むことができない。

なぜラバはラバを生むことができないかのこの一般的な論証はアリストテレスにより「あまりに一般的でありまた空虚である」と言われる (748a7f)。一方, これはロギコスな議論それ自体の批判ではなく, それが生物的な主題には適切に適用されていないことを示している。しかしながら, われわれの現在の関心においては, ロギコスな議論が同と異という一般定な概念に訴えることにより打ち立てられ, そして自然学的な説明と同一の結論に導きうることに注意を促しうるならそれで十分である。

- (3) 例えば, Philoponus は『分析論後書』B. 10. 93b38 について ‘horos’ と ‘horismos’ 双方を互換可能なものとしてコメントしている。J. Philoponus, *Analytica Posteriora Commentaria in Aristotelem Graeca ad. loco.*, ed. M. Wallies (Berlin 1909)。J. Barnes もまた 93b38 を ‘One definition of definition (*horos horou*) is the one we have just stated’ と翻訳している。Aristotle’s *Posterior Analytics* p. 58 (Oxford 1993)。H. Bonitz は ‘horos と horismos はほとんど識別しがたいものとして (*ferè promiscue*) 定義を意味表示すべく採用されている」と述べる。H. Bonitz, *Index Aristotelicus*, S. 530 (Berlin 1870)。R. Smith は「これら二つのあいだに何ら意味上の差異はないように思える。しかし, 注記するに値することは, horismos は『トピカ』の外で優勢でありそしてしかも『分析論』では語 horos はほとんど常に「項」(term)の意味を持つ」と述べる。R. Smith, *Aristotle Topics Books I and VIII*, p. 58 (Oxford 1997)。D. Bostock は『『トピカ』(101a19–23, and passim)と同じくらい早い時期から, この句 [‘the what [it] was (for a thing) to be’] は「定義」(definition)と互換的に用いられてきた」と言う。D. Bostock, *Aristotle Metaphysics Books Z and H*, p. 86 (Oxford 1994)。Wagner /Rapp も同じく ‘horos’ を ‘definition’ と翻訳している。(Wagner/Rapp, *op. cit.*, ad. loco)。近年では, テクストの改変さえ提唱されている。I. Ludlam は「私は哲学的かつ文献学的考察に基づく論拠を伴い, ‘horos’ はたいていの場合 ‘hor <ism> os’ に修正されねばならないことを提案する」と言う。Defining Terms in Aristotle’s Topics: *horos* or *hor <ism> os*, *Mnemosyne*, Vol. LIII, Fasc. 3, p. 267 (Leiden 2000)。

‘horos’の翻訳として「定義項」(*definiens*)は、実質的に同一内容であるにしても、避けるべきである。アリストテレスは‘horos’を定義的实践に先行して置かれる四つのプレディカピリア(項の諸型)を提示する文脈において導入している。‘horos’は定義されうる本質を意味表示する説明言表の名前である。名前(*onoma*)とそれに交換される「定義形成句」(*horos*)は定義可能なものを意味表示する。それと対照的に、‘*definiens*’は *definiendum* (*horisthen*)と共に一つの定義の分析された部分であるということにおいて既に一つの存在している定義を前提にしている。

- (4) 『トピカ』A. 14における「弁証術的議論において生起する問いの三つの広い諸型」の議論において、Burnyeatは「この箇所の‘*logikos*’は、アリストテレスに独一なものであるが、倫理学と自然学と対比される、探求の特定の領域を選抜している。哲学の「論理学」(*logic*)、自然学そして倫理学の三部分の区分 (*tripartite division*)はアカデメイアの第三学頭クセノクラテスに帰せられている、そして『トピカ』A. 14は恐らく読者がそれに知悉していることに依拠している。その場合にとりわけ有意なことは、アリストテレスが彼の論理学的著作の主題に対する全体的な術語として(*an overall term*)として‘*logike*’を採用していないということである」。(*M. Burnyeat, op. cit.*, p88f).彼の哲学の三つの部分への分割 (*divisions of philosophy*)の議論において、Burnyeatは倫理学と自然学における具体的な対立物(例、善と悪、熱と冷)が「反対対立」という一層普遍的かつロギコスな術語に還元されうることをそして弁証術的な仕方においてもまたロギコスなつまり哲学的な仕方においても一般的な術語において議論されうることを認識し損ねている。私は「存在」や「同」そして「何であるか」のような一般的概念は単に『オルガノン』だけではなく、『形而上学』におけるロギコスな探求の主題でありうると解する。

Burnyeatの「オルガノンからなじみ深いもの」(*familiar from the Organon*)というロギコスの基本的な理解は解決よりも多くの問いを生成する(p. 15)。実際、『オルガノン』に見出される「弁証術的」および「分析的」を含む、あらゆる方法に適用されるロギコスな議論の統一的な説明はあるのか。もし存在しないなら、これらの方法はどのように関連しているのか。或る論点は分析的にもロギコースにも議論されうるのか。形式的な諸概念は問題における目的に依存して、ロギコースにも弁証術的にも双方の様式で議論されうることを私は明らかにする。Burnyeatは「ディアレクティコース」に遂行される弁証術の実践と「ロギコース」に構成される弁証術の理論とのあいだにあるアリストテレスの区別を把握し損ねている (cf. p. 89, 102)。

この方法のWedinの解釈も同様の批判にさらされよう。彼はBurnyeatの仕事に言及しながら、「これらの注記 [1029b13-22 における自体性の二つの概念] は「論理的」(*logical*)である、なぜならそれらは論理的著作において提示されている諸関係の領域の内側で本質の概念を位置づけることをめざしているからである」と主張している。*M. Wedin, op. cit.*, p. 201.

- (5) Philoponus は、はたして「ロギケーそして弁証術の営み」(*Hē logikē te kai dialektikē pragmateia*) は哲学の「部分」であるのかそれとも哲学の「道具」であるのかを論じる。彼はストア派はそれを部分として見做しているが、逍遥学派はそれを哲学の道具として見ていますと主張する。ここで Philoponus は接続し「そして」(*kai*) を説明的なものとして用いている。もし彼が '*dialektikē*' により弁証術の理論を意味しているなら、この訓練は哲学の部分であるに違いない。さもなければ、彼そして他の当事者たちは '*logikē*' が何を意味するかを理解し損ねている。I. Philoponus, *In Aristotelis Analytica Priora Commentaria*, p. 6, ed. M. Wallies (Berlin 1905), cf. Alexander Aphrodisiensis, *In Aristotelis Analyticorum Priorum Librum I Commentarium*, p. 3, ed. M. Wallies (Berlin 1883). なお古代自由学芸において蓋然性に留まる *dialectica* の下に *logica* が教えられるべきか否かについて長く論争された。cf., H.-I. Marrou, *Saint Augustin et la fin de la culture Antique*, p. 218 (Paris VI 1958). これも弁証術の理論と実践を判別できなかったことに由来する混乱である。
- (6) T. H. Irwin, *Aristotle's First Principles*, (Oxford 1988). Irwin は 'strong dialectic' に存在の学の内側で客観的な第一諸原理に到達させる役割を帰属させている一方で、彼は 'pure (ordinary) dialectic' に知的な訓練として通念 (共有見解) としてもたれる信念を吟味する役割を帰属させている (p. 8, 476). 彼が認めるように、この区別はあるべきほどには明晰ではない。しかしながら、Irwin はさらに主張している、「強い弁証術は諸命題が通念の信念の事柄であるという事実を越えて、受け入れることの何かよい理由をわれらが持つという前提にわれらを固執するよう要求する」。だが彼は強い弁証術的な前提は弁証術的前提の「一つの下位集合」(a subset) でありそしてそれゆえに「通念の信念の事柄」であると認めている (p. 476). 最後に、彼が「アリストテレスは主要な点の幾つかについてはまったく非一関与 (non-committal) 的である」と語る時、彼はアリストテレスの弁証術の説明には或る不明瞭なところがあると示唆している。しかしながら、これらは Irwin が「いかに弁証術は通念である信念を越えて、…客観的な諸原理に導きうるか」を探究するという非アリストテレス的なプロジェクトに従事しているものとして自らを見ているかを示すまさに主要なポイントである (p. 479).
- E. Berti は同様に弁証術の実践の内部に 'scientific use' と 'public use' を区別している。E. Berti, *op. cit.*, p. 106.
- (7) G. Ryle は「われらはアカデメイアにおいて同時期に「弁証術」という語はまったく異なる二つの仕方で見られているという印象を持つ」と述べる。*Plato's Progress*, p. 127 (Cambridge 1966).
- (8) E. g., P. M. Huby, The Date of Aristotle's *Topics* and its Treatment of the Theory of Ideas', p. 76, *Classical Quarterly* 12, 1962. cf., J. Barnes', Review on *Aristotle On Dialectic; The Topics*, ed. G. E. L. Owen, *The Philosophical Review*,

pp. 558-565, LXXIX, No. 4, 1970.

- (9) Alexander はソクラテスへの批判はアリストテレスの弁証術と論証科学の区別に依存していると理解している。Alexander の見解によれば、ソクラテスが批判されるのは、ソクラテスは幾何学者により遂行される厳密な論証のタイプを求めたけれども、弁証術的推論の基礎のもとにはそれを成就できなかったからである。Alexander は言う、「論証の書において示されているように、定義は推論と論証の原理であるので、ソクラテスは何であるかの推論と定義を求めたことは道理あることである。一つの定義を持つことなしに推論（弁証術的推論を見よ）はありうるので、アリストテレスは、当時弁証術は、例えば「快は善である」を、それが何であるかつまりその定義を把握することなしに、推論するほど十分に強力なものではなかったと主張した」(p. 718, 4-11)。ソクラテスは論証に基づき定義を求めたと Alexander は考えた。しかし、アリストテレスが批判しているのはソクラテスの弁証術それ自身における力の欠如である。ソクラテスが自ら持たなかった論証理論と弁証術を対比することは Alexander の時代錯誤である (987b1-22, 642a27-b4)。Alexander Aphrodisiensis *In Aristotelis Metaphysica Commentaria*, p. 741 (Berlin 1891)。Cf. N. Gulley, *The Philosophy of Socrates*, p. 5 (Macmillan 1968)。
- (10) 『命題論』においてアリストテレスは一つの主張の真偽の分析が弁証術的实践にとって有意味である諸様式を議論している。「然り」または「否」いずれかの答えにより応答されうる一つの問題を形成することが不可欠である。「然り一否」の応答は「一つの肯定」と「一つの否定」の反対対立ないし矛盾対立するペアーに対して適切に与えられうる。アリストテレスは言う。「多くのものについて一つのを、または一つのものについて多くのものを肯定することないし否定することは一つの肯定または否定ではない、もし多くのものが一緒にひとつのを形成しているのでなければ。私は、もし一つの名前があるが、それらが形成している何か一つのが存在するのでないならば、それらを一つのものとは呼ばない。…そういうわけで、もし一つの弁証術的問題が提示された命題か矛盾の一方のサイド(その命題は実際には一つの矛盾の一方のサイドである)かを答えとして要求するなら、これらの場合に一つの答えは存在しえない。というも、問題それ自身は、たとえそれが真であるにしても、一つの問題ではないであろうからである。また「何であるか？」は弁証術的な問題でもないことも明らかである。というも、問題はひとが望む矛盾のどちらのサイドであれ述べることの選択をひとに与えるものでなければならぬからである」(ch. 11, 20b14-27)。アリストテレスは諸主張の一つの矛盾のペアーを形成しない三つの種類を提供している。第一に、7章で、「人間は白い」のような、肯定そして否定双方とも真でありうる、普遍に関わり形成される非-普遍的な主張の場合においてそうである。第二に、8章で、例えば、語「衣服」が人間と馬双方に適用されるとき、この語「衣服」は双方とも偽である肯定と否定をもたらす「衣服は白い」のような場合にお

いて、見かけ上端的であるが、実際には二つの異なる主張が隠されている場合においてそうである。除外される第三の種類は、9章で、「明日の海戦」のような単称未来文に関わるものである。

アリストテレスにより選択されている公的な事件である海戦の事例は意図的なものである、というのもそのような出来事が明日生じるか否かはほとんど明らかだからである。それは「まだ真または偽ではないが (*ou mentoi êdê alêthê ê pseudê*)、他方よりも一方がより一層真である (*mallon men alêthê*)」という出来事の種類として記述されている (19a38)。彼が「より一層真である」と言うとき、反対言明の一方の部分はより高い真の可能性を持っているそしてそれ故に、彼は真理値に関し可能性の差異を認めており、単純な二値の原理に同意しているのではなく、よりきめの細かい真理値の可能な程度の理論に彼は与している。単称未来言明は矛盾対立するペアーを構成しえないので、そのような言明は「既に (*êdê*) 真または偽」という言明を形成しないと語られる。

語 '*êdê*' ('既に') は論理的なもの即ち「それによって」 (thereby) (e. g., Whitaker) か或いは時間的なもの「既に〜ではない」 (not yet) (e. g., Hintikka) と理解するかで解釈が分かれている。主張の一ペアーは当該の出来事が未来時称により記述されているという事実によりまだ矛盾を構成していない限り、この文は時間的に理解されねばならない。決定論がここでは問題にされているとする注釈者たちは、それは可能な解釈ではあるが、本来は単称未来の出来事の議論が言明の矛盾対立ペアーの規則が適用されえない第三の事例であるという文脈を見て取り損ねているように思われる。G. W. A. Whitaker, *Aristotle De Interpretatione Contradiction and Dialectic*, p. 122 (Oxford 1996), J. Hintikka, The once and future sea fight: Aristotle's discussion of future contingents in De Interpretatione 9, *Time and Necessity*, p. 174 (Oxford 1973)

- (11) 論理的文脈において、アリストテレスは「項 (term)」と翻訳される '*horos*' の別の使用を導入している。「私が「項」と呼ぶのは、述語と述語がそれについて述語づけられるものへと命題が分析されるところのものであり、「ある」または「あらぬ」がそれに付加される」 (*An. Pr.*, A1. 24b16f)。本質を意味表示する説明言表は「項」として処理されるので、「項」は「定義形成句」よりもそのカヴァー領域においてより広い (e. g. 91b2, 94a35)。Cf. S. Peterson, 'Horos (Limit) in Aristotle's *Nicomachean Ethics*', *Phronesis*, vol. XXXIII, No. 3, 1988.
- (12) E. Strycker のプラトンにおける語 '*horos*' の分析を見よ。Concepts-clés et terminologie dans les livre ii à vii des *Topiques*, *Aristotle on Dialectic The Topics*, ed. G. E. L. Owen, p. 144 (Oxford 1968)。Strycker が言うように、「プラトンには、'*horismos*' が完全に欠けている」けれども、プラトンには '*horizesthai*' のようなその動詞表現における多くの使用を見出すことができる (e. g. *Lach.*, 194c8, *Gorg.*, 453a7,

Resp., 436b5, 474c)。

- (13) およそ六十回「定義形成句」があらわれる中で、その用法を大まかに五つのグループに分割することができる。私はそれらのグループのそれぞれの典拠を提示したい。ただし、いくつかの場合は他のグループに入れることができるかもしれない。

アリストテレスは‘*horos*’を以下の文脈で用いている。

(a)その機能と成分を議論する際 (e. g., 101b22, (1) 01b38, 02a26, 35a11, 40a27, 41b3, 43a12, 15, 16, 20, 21, 53a15, 16, 54a11)。

(b)その他のプレディカビアと一緒にそれを枚挙する際 (e. g., (1) 01b25, 37, 03b5, 18)。

(c)その *topoi* が提出された定義形成句を確立したり覆すことに関わる際 (e. g., (1) 30a31, b14, 25, 31b37, 52b38, 53a2, 6, 8, b26, 26, 54a24, 35, 36, b1, 2, 55a3, 7, 10, 18)。

(d)それらのガイドとしての定義実践との関連において (e. g., (1) 39a24, 40a24, 41a34, 48a26, 32, b23, 49a29, 30 (私は写本‘*cu*’を採用する), 54a11, 58a33)。

(e)例を与える際 (e. g., (1) 18b21, 21a11, 39b25, 36, 40b2, 7, 29, 48a15, 20, 26, 49b26, 51b11, 58a33)。定義形成句の例はちょうど、その他のプレディカビアについての議論のため、そしてこのプレディカビアにおける *topoi* を検討するために、挙げられる。

- (14) B. 10 においてアリストテレスは『トピカ』A. 5, 101b38-2a5 との平行箇所ですべてしている。「定義は何であるかの説明言表であると言われるので、定義は名前かまたは他の名前のような句が何を意味表示するかか或る説明言表 (*tis logos*) となるであること明らかである。例えば、「「三角形」が何を意味表示するかは、それ [意味表示されるもの] が三角形である限りにおいて、三角形は何であるかである」(93b29-32)。「名前が何を意味表示するかか或る説明言表」を定義としての説明言表と同一化することの「明らかさ」はこれら二つの種類の説明言表のあいだの四つの可能な形式的な組み合わせから生じる。四つの組み合わせは以下の通りである、ただし‘E’は何であるかの説明言表を表し、そして‘S’は名前が何を意味表示するかか或る説明言表を表している：(1)(E+S⁺), (2)(E+S⁻), (3)(E-S⁺)そして(4)(E-S⁻)。B. 7. 92b26-34 においてアリストテレスは(3)(E-S⁺)の可能性について論じそしてその不条理性を三つの理由で説明している。彼は言う、「かくして、もし定義する者が何であるかまたは名前が意味表示するものは何かのいずれかを証明するなら、もし定義が決して何であるかについてないのであれば、定義は名前と同じものを意味表示する説明言表でなければならない。しかしこれは不条理である」(92b26-29)。アリストテレスはここで名前が意味表示するものは何かと何であるかのあいだで選択すべく、一方を他方から分離して擬似的な二者択一を提示している。換言すれば、彼は名前が何を意味表示するかか或る説明言表は決して何であるかのそれとして看做されることはないであろうという仮定のもとにこれを提示している、この仮定それ自身何ものによっても裏づけられな

いものであるが、定義する者は仮定により何であるかに関与できない以上、定義者はただ名前が何を意味表示するかを証明する。しかしこれは不条理である。両者の分離することの不条理の第一の理由 (ab1) は非一実体についてだけでなく、非存在についても定義が存在することになることである。というのも、非存在も有意味な名前を持ちうるからである。第二の理由 (ab2) はひとはどんな説明言表にも名前を付けることができるので、あらゆる説明言表が定義になるでもあろうからである。「それ故に、われらはすべての会話において定義形成句を語りそして「イリアス」も定義になるであろう」(92b30f)。どんな発言も、それに名前が付けられる限り、定義になるであろう、定義というものが厳密に名前が何を意味表示するかの説明言表と同じものである以上は。例えば、もし「イリアス」のすべての文章ないしたとえ最初の文章だけを吟唱するなら、われわれはそれに名前を付けることができる、かくして定義形成句を吟唱していることになるであろう。文「「イリアス」も定義となるであろう」は名前「イリアス」がその本の内容と共に定義を形成するであろうという意味である。第三の不条理性の理由 (ab3) は「いかなる論証もこの名前がこれを明らかにするということも、また定義がこれを加えて明らかにするということも論証しないであろう」というものである (92b32-34)。何故にそうであるかと言えば、この不条理な仮定のもとでは、ひとは名前が何を意味表示するかとその存在を論証が証明するところの対象のあいだの同一性を確立することができないということ、さらに定義も同一性を確立することができないということにある。このようにして、アリストテレスの論証理論に基づく新しい定義論は先の擬似的な前提を排除することによりこれらの不条理性を乗り越えるものでなければならない。

B. 7で(3)(E-S+)が排除されたことからそして B. 10における「定義は何であるかの説明言表であるので」という言明における (E+) の受容からして、「名前が何を意味表示するか」の諸説明言表 ((1)(E+S+), (3)(E-S+)) のうち、「或る説明言表」つまり(1)(E+S+) の説明言表が定義「となるであろう」こと「明らか」になる。名前「三角形」が何を意味表示するかを述べる言語行為は、それが世界にある三角形を意味表示する限り、三角形は何であるかの説明言表になるであろう。

- (15) R. Smith はプレディカピリアを考察する際に「定義的」の役割に気づいていない。彼は次のように書いている。すなわち「その [A. 6 の] 文脈は奇妙だ。第一に、アリストテレスはわれらが本当に全ての「問題」を定義的だと呼び得るかもしれないと論じている。次に、このことは一つの手続きを追求する理由ではないということ、それが持つであろう捉えどころのなさや不都合を引き合いに出して、彼は述べている」。R. Smith, *ibid.*, p. 67. しかし、この章において「奇妙な」ものは実際に何も無い。第一に「問題」が定義的と呼ばれるのは、それが「Fとは何であるか？」という問いに直接的に応答することなしに「Fは何であるか？」への可能な返答の分類に関わるからである。第二に、これらの説明言表が全て定義的であっても、われわれはソクラ

テスの探求におけるように単一の普遍的な方法を追求すべきではない。ここで批判されているのは、諸定義を見出すべくソクラテスが一つの普遍の方法を求めることなのである。

J. Brunschwig は「定義的」の特別な重要性を見ておらず、「定義」から「定義形成句」を区別していないので、「定義的」についてのアリストテレスの説明において A. 5 102a9f と A6 102b33-35 の間に乖離があると彼が主張するとき、彼は自らの誤解をアリストテレスに帰することを余儀なくされた。彼は「その行 [102b33-35] はアリストテレスの側の真正な誤りを含んでいる…第 6 章の考察は非定義的プレディカビリアが諸定義と同じ方法に従うべきことを全く示していない。その考察は、全く異なるものであり、諸定義が非定義的プレディカビリアと同じ方法に従うべきことを示しているのである」と述べている。J. Brunschwig, *Aristote Topiques I-IV*, p. LXXXI (Paris 1967).

- (16) D. Charles はソクラテスが項が意味するものは何であるかを事物の本質の説明言表から区別しなかったと論じている。D. Charles, *Types of Definition in the Meno*, p. 117ff, *Remembering Socrates*, ed., L. Judson & V. Karasmanis (Oxford 2006).
- (17) W. Goodwin, *Syntax of The Moods and Tenses of The Greek Verb*, p. 13 (Macmillan 1929). 弁証術的未完了過去の典型的な事例はアリストパネスの『鳥』279f に見られる。「ここにまた頭冠毛(かむりげ)をおっ立てたのが来たぞ。この怪物はいったい何であるか。それではお前一人が戴勝鳥(やつがしら)ではなかったのか、もう一羽いたのか?」(*Ti to teras touti pot'estin; Ou sy monos ar'esth'epops, alla choutos heteros;*)。ここでベイスタイロスは「一体何であるか?」の問いに続き、もう一羽がいることに気づき、未完了過去で対話相手に問い直している。他にも、最初は気付かれなかったが、証明の過程において開示された事実を思い出させるこのタイプの未完了過去を数学的証明において見出すことができる(94a34)。未完了過去の同様の使用については、例えば 1051a23, 26, 92a16 参照。Alexander が『トピカ』A. 5 の注解において、未完了過去時制は現在時制「ある」と等価であると示唆しているが、彼が弁証術的未完了過去を念頭においているかどうかは不明瞭である。彼は言う、「さて、*'ên* は過ぎ去った時間を表現すべく用いられておらず、むしろ *'esti*」(「ある」)を表している。この種の使用は習慣的である。というのも、ひとが *'touto ên*」と言うとき、*'touto esti*」(「すなわち」)と同じことを語っている。…またひとが「ドアを叩いているのは誰だった?」と言うとき、「ドアを叩いているのは誰だ?」の代わりに語っている。Alexander Aphrodisiensis, *In Aristotelis Topicorum Libros Octo Commentaria*, ed. M. Wallies, p. 42 (Berlin 1891).
- (18) Liddell & Scott, *Greek English Lexicon, ad. locum*, (Oxford 1996).
- (19) J. Owens, *op. cit.*, p. 183, C. Arpe, *Das ti en einai bei Aistoteles*, S. 15, 18 (Hamburg 1938).

- (20) D. Ross, *Aristotle's Metaphysics I*, p. 127 (Oxford 1924). C. Arpe, *op. cit.*, S. 18, Frede & Patzig, *op. cit.*, II, S. 34 'Was es für den Menschen heißt, ein Mensch zu sein'.
- (21) Wagner/Rapp は「P が事物と換位して述語づけられる」とその「否定」の区分と「P が本質的に (wesentlich) 事物に属する」とその「否定」の区分の組み合わせにより四つのプレディカピリアへのこの排他的分類を演繹証明の結果として正しく指摘している。しかし、彼らは「固有性条件」(A) の細分の根拠を考察しておらず、何故 (i) と (ii) というさらに並行している二つの問いが提起されるのかを、すなわち背後に「何であるか?」の問いが「何であるか条件」(B) として機能していることを把握していない。Aristoteles *Topik*, S. 276. この判別を次の論文に負う、北郷彩「アリストテレスにおける範疇の基礎としてのプレディカピリア」『哲学』北海道大学哲学学会 vol. 43, pp. 1-20, 2007.
- (22) 例えば M. Frede は、彼が次のように述べる時、プレディカピリアと諸範疇の関係を理解していない。「われらは A. 9 の第一文においてプレディカピリアを区別したので、次に諸範疇を区別すべきだと言われている。何故アリストテレスがこの区別をなすべきと考えるのか、すなわち彼がどのようにそれがなされるものと考えているのかについて、われらがいつそうよく理解したとすれば、明らかに諸範疇が何であると想定されているかについてのわれらの理解は大きく増すであろう。残念ながら、『トピカ』におけるアリストテレスはこれらの問いのいずれの議論にも進んでゆかないのである」。M. Frede, *Categories in Aristotle, Essays in Ancient Philosophy*, p. 47 (Oxford 1987).
- なお、私は以下展開するように、十個の範疇がこの章において初めて導入されると考えると、『範疇論』は少なくともこれより後の作品であると位置づける。実際には、「第一実体」と「第二実体」(2a11-14)の区別、さらには「結合なしに」(1a16)語が分類されるという考えは「述定」の分類を企てる A. 9 とは明白に異なる主張を含んでおり、偽作の疑いが濃いと考えている。
- (23) J. Brunshwig, *op. cit.*, ad. locum, n. 2, R. Smith, *op. cit.*, p. 74, L. A. Dorion, *Aristote Les réfutations sophistiques*, p. 347 (J. Vrin 1995).
- (24) 語 'hē katēgoria' は『トピカ』において少なくとも 11 回みだされるが、解決済みの同意がないまま、いくつかの解釈が提示されている (103b20, b25, b27, b29, b39. 107a3, 109b5, 141a4, 152a38, 178a5, 181b27, cf. 107b18)。語 'hē katēgoria' は術語的な意味における「クラス」や「類」であると理解されてきているか、「述定」であると、或いは時に「述語」として理解されてきている。Cf., M. Frede, *ibid.*
- (25) H. H. Joachim, *Aristotle On Coming-To-Be and Passing-Away*, p. 91 (Oxford (Olms), 1922 (1970)).
- (26) J. Ackrill, *Aristotle's Categories and De Interpretatione*, p. 76 (Oxford 1963).

- (27) I. Düring, *Aristoteles Darstellung und Interpretation seines Denkens*, S. 60 (Heidelberg 1966).
- (28) Ackrill は彼が「この節 [102b29-35] において、つまり「何であるか？」の問いが
いづれの範疇における項目にも差し向けられるものとして考えられているところで、
アリストテレスはもはや第一の範疇のラベルとして「何であるか？」を用いることが
できず、「実体」を意味する名詞を採用している」と言うとき、意味表示の二重の機
能を理解し損ねている。Ackrill の主張は真ではない、というのも二つの範疇 (CP
と (CE) 双方とも『形而上学』Z.1 におけるように他の個所で用いられているからで
ある (1028a14, a36-b2)。J. Ackrill, *ibid.*, p. 80.
- (29) 或る解釈によれば、「それぞれ」を「絶対副詞句 (「それぞれに関して。)」と読み、
主文の文法的主語ではないと理解する。しかし、アリストテレスはそれぞれの項を主
語としてであれ述語としてであれ述定の二つの種類の構成要素として議論している。
M. Malink, 'Categories in Topics I. 9', *Rhizai* IV. 2. 278 note. 21 2007 参照。
- (30) 私は (i) と (ii) という区別を具体的な事物についての二つのタイプの述定に関わ
る区別と考える DE Rijk に同意しない。Rijk は次のように述べている。「この箇所
[103b29-39] の趣旨は今や理解可能である。アリストテレスの考えでは、それぞれの
そして全ての議論は具体的な事物についてのものである…「色白いソクラテス」は彼
のまさに「これ性」(*auto*) …彼個人が人間であることもしくは動物であることに即
して語られるか、あるいは彼が白いこともしくは色のあることに即して語られるかの
いずれかであり、その固有の存在とは何か異なるものである (*heteron*)」。DE Rijk,
Aristotle Semantic and Ontology, Vol. I. p. 488 (Brill 2002)。アリストテレスのこの
章の目的が議論の種類を決定することである以上、彼は単に具体的な事物に関わっ
ているわけでもなければ、存在の二つの様式に関わっているわけでもない。同一である
こと (*auto*) と他のものであること (*heteron*) のあいだの彼の区別は「人間」や「白」
のように普遍的な項でありうる項「それぞれのもの」(b36) に関する述定の十の種類
の分析に基づいている。

謝意：この論文の初期の版の幾つかの部分は、Christopher Rapp 教授のベルリン
自由大学における研究会において (2005 年 3 月 Berlin) そしてオックスフォード
大学の David Charles 教授により主催された二つのワークショップ (Essence and
Substance, Historical Perspectives (2005 年 6 月) と Ancient and Modern Es-
sentialism (2006 年 6 月)) において読み、検討された。さらに Alan Code 教授に
より主催されたラトガス大学における学会 'Aristotle on Predication' (2008 年 10
月) において、また Stelios Virvidakis 教授のアテネ大学の研究会 (2009 年 3 月)

において読み, 検討された。参加者の有益な批評に感謝する, とりわけ最も初期の構想の段階で有益な助言をいただいた岡部勉氏と新説の展開に励ましを頂いた Christopher Shields 氏に感謝する。なによりも, この問題について二十年以上議論を続けてきた David Charles 先生に心からの謝意を表したい。この論文は Charles 先生との共同研究 (International Collaborative Activities/Joint Project grants between the British Academy and Japan Society for the Promotion of Science (D. Charles and K. Chiba 'Essence and Explanation: Aristotle and Modern Scientific Essentialism' 2005-6)) の支援を受けている。この英語版 Aristotle on Essence and its Defining-phrase in his Dialectic は *Definitions in Greek Philosophy*, ch. 6, ed. David Charles (Oxford 2010) に掲載されている。